

第5節 上中尾地区（岡1号墳、南地区）

1 調査の概要

本地区は遺跡群内の南東部に位置する山林の約2,000㎡である。地区内の遺構分布は北部に古墳1基、南地区とした南部に竪穴遺構、竪穴住居跡、土坑などが所在した。

岡遺跡群の古墳については、事前の分布調査で3基が確認されている。古墳の所在する丘陵は、東北方向へ流れる丹生川に形成された広い沖積平野の北側に位置する。古墳群はこの丘陵の細長い尾根上に形成されているが、いずれも南に広がる平野部を見下ろせる場所が選択されている。古墳は東から岡1号・2号・3号墳と呼称している。このうち造成予定地に所在する2基について調査を実施し、岡3号墳は内無川3地区の北東辺と接するが範囲外にあるため、調査対象から除外した。

以下、岡1号墳を本節の上中尾地区、岡2号墳を次節の林頭地区で説明する。

1号墳は分布調査時の観察では、墳丘の盛土が低く、丘陵の起伏との区別が難しかった。このため、確認調査では主体部の検出に主眼が向けられた。結果的には古墳であることを確認したが、石棺の一部を削り取ってしまうこととなった。墳丘は墳頂付近に盗掘坑があり、一部掘削を受けていたが、遺存状態は比較的良好といえた。開発事業の計画上、現地保存が困難であるため、記録保存を目的とした本発掘調査を実施した。

2 古墳の調査（第109図）

古墳は墳径15m、比高1m～1.5mの規模をもつ円墳で、主体部が箱式石棺であった。

本調査では、古墳及び調査区全体の地形測量を実施し、古墳の基礎資料とした。発掘調査はトレンチ調査から始め、墳丘の表土を除去し墳形の確認を行い、主体部を完掘する方法をとった。

古墳の形態・規模・構造を把握するために墳丘を中心に13本のトレンチを設定した。墳丘・主体部については既に試掘調査の段階で設定した北東から南西方向のトレンチ1・2及び墳頂から南東裾部のトレンチ3を若干修正した。さらに周溝及び周辺部にはトレンチ4～11の8本のトレンチを設定し、墳丘裾部、周溝及び関連遺構の確認を行った。このほか、古墳の北東部と西部にトレンチ12～14及び現道の断面で土層の堆積状態を観察した。

（1）墳丘（第110図・第111図～第114図）

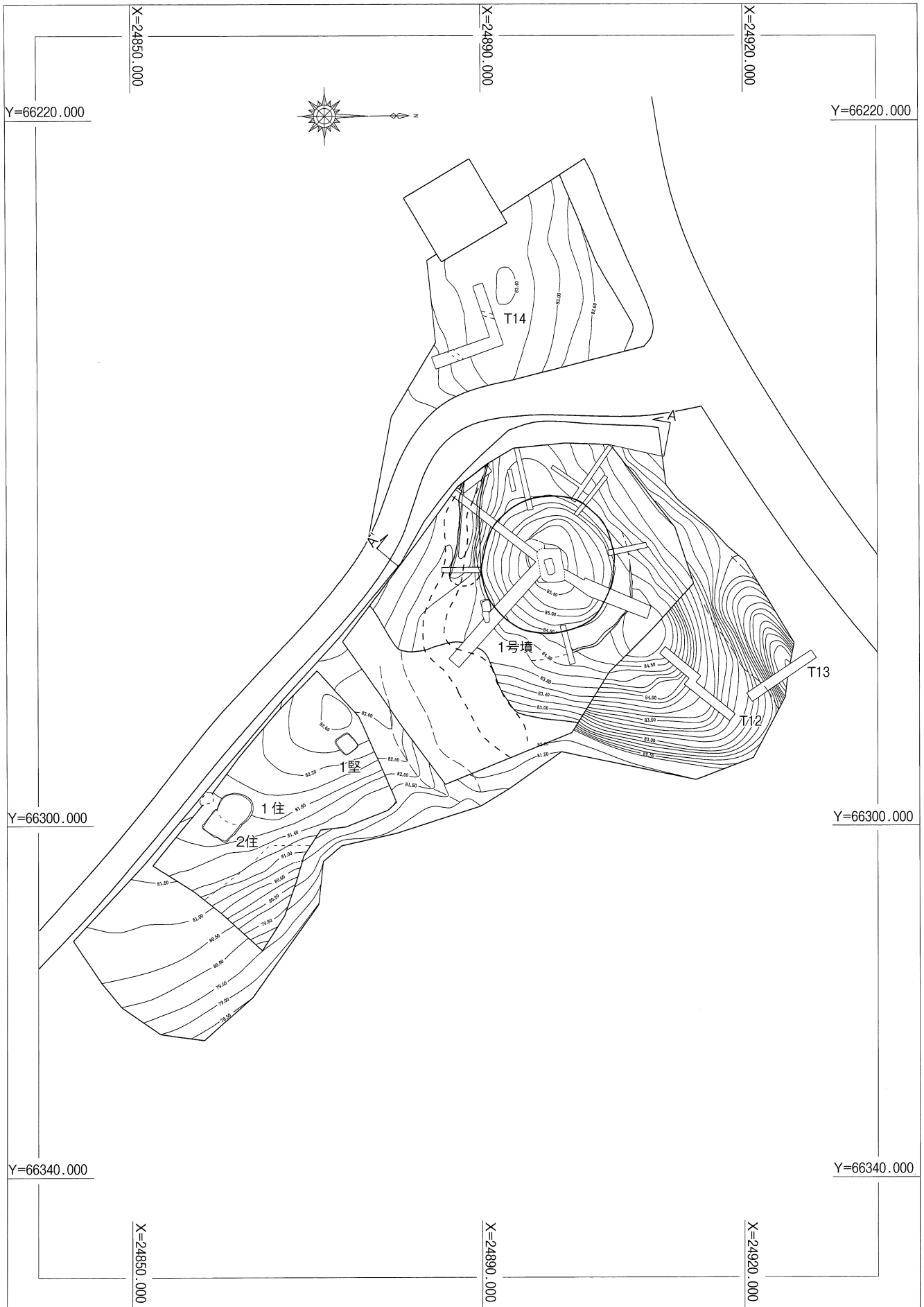
トレンチ1・2は墳丘盛土、周溝を確認するための主要なトレンチである。土層観察では、1層：表土腐植土、2層：粗粒軟質黄褐色土、3層：粗粒軟質黄褐色土（墳丘の二次堆積土）が表土層である。墳丘盛土は3層に区分でき、4層：軟質黄褐色土で砂性が強く黄褐色土ブロックを若干含む。5層：混黄褐色土ブロック若干軟質黄褐色土、6層：粗粒暗黄褐色土となっている。地山は7層：黒黄褐色土で8層の風化土、8層：硬質黄褐色土、9層：ブロックを混じる硬質黄褐色土、10層：鉄分の含有量が多い赤黄褐色土である。周溝の覆土は①：黒黄褐色土、②：ブロック混入の黒黄褐色土の2層に区分できる。

墳丘は、地山層を削り出して墳丘の基部を作り、3層の盛土が行われている。基部直上は6層の粗粒暗黄褐色土を0.1m～0.5mの厚さに積み上げており、その範囲は墳丘の東側では中心寄り約2/3、西側では墳丘全体におよんでいる。5層は黄褐色土ブロックを含む軟質黄褐色土であるが、墳丘東側で中心から1/2、西側で2/3と狭い範囲に厚さ約0.2mで積み上げられてる。4層は砂性の軟質黄褐色土であるが、0.05m～0.3mの厚さで墳丘全体を形成している。

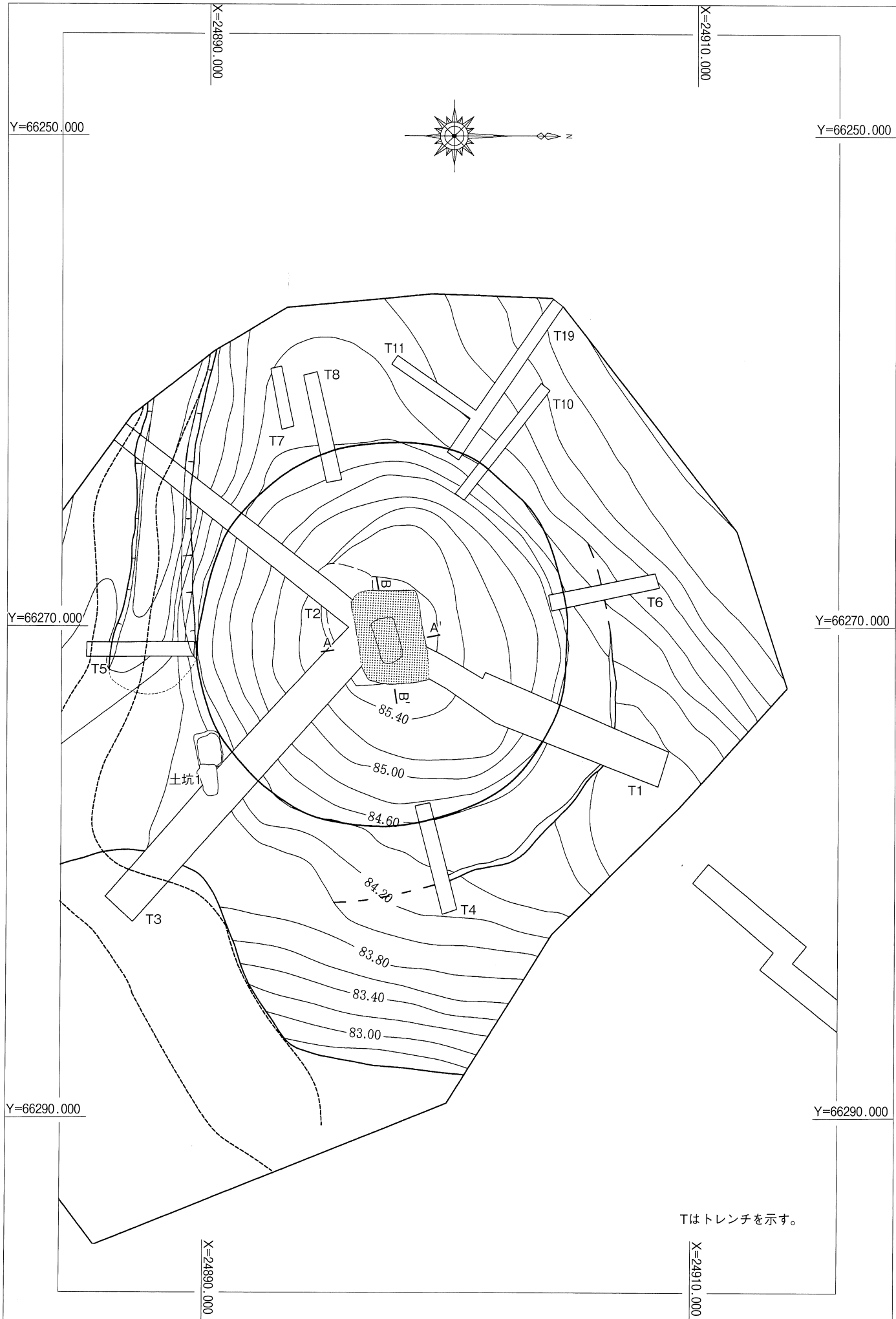
トレンチ3はトレンチ1・2と直交して墳丘の南東部に設定した。墳丘盛土は墳頂付近では明確であるが、墳端部では流失している。

トレンチ4・6は周溝の延長を確認するために、古墳が所在する丘陵の傾斜変換点にあたる位置に設定した。周溝の立ち上がりは明確でなかった。

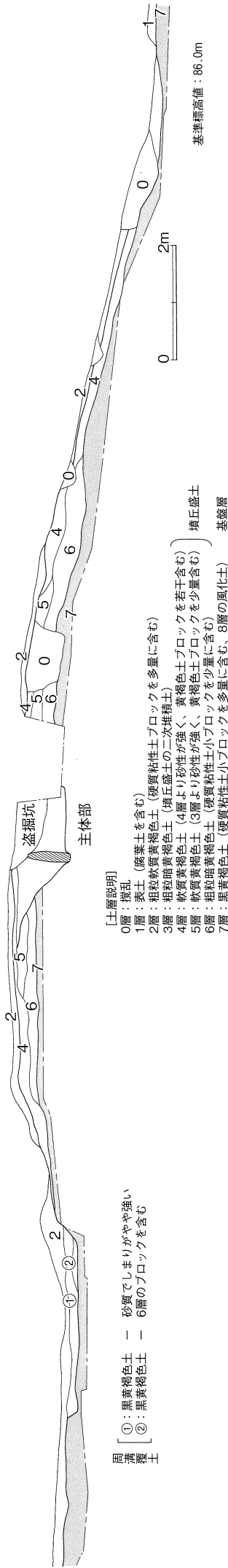
トレンチ5はトレンチ2と3の間に設定した。溝状の落ち込みが土層断面で確認できるが、丘陵の裾に沿って伸びており、周溝ではないと考えられる。



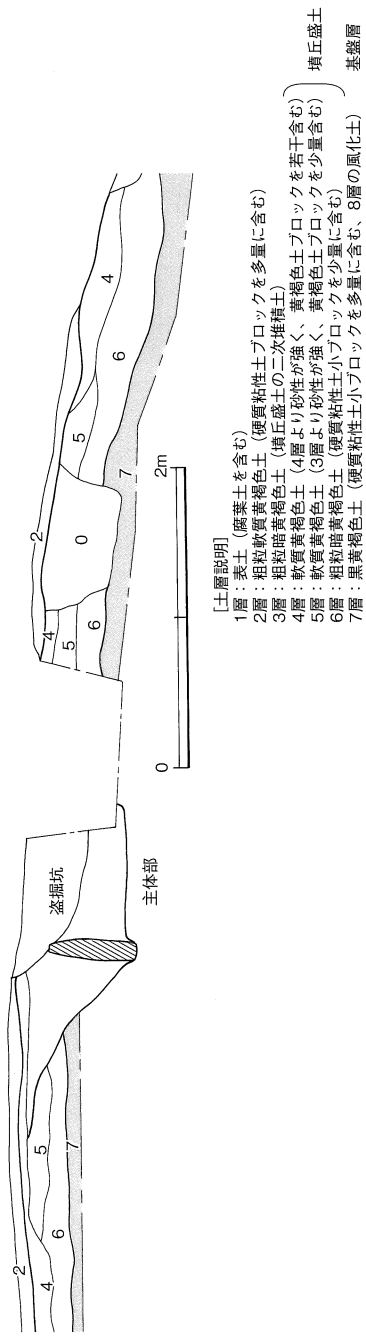
第109図 上中尾地区地形図（完掘時）（1/600）



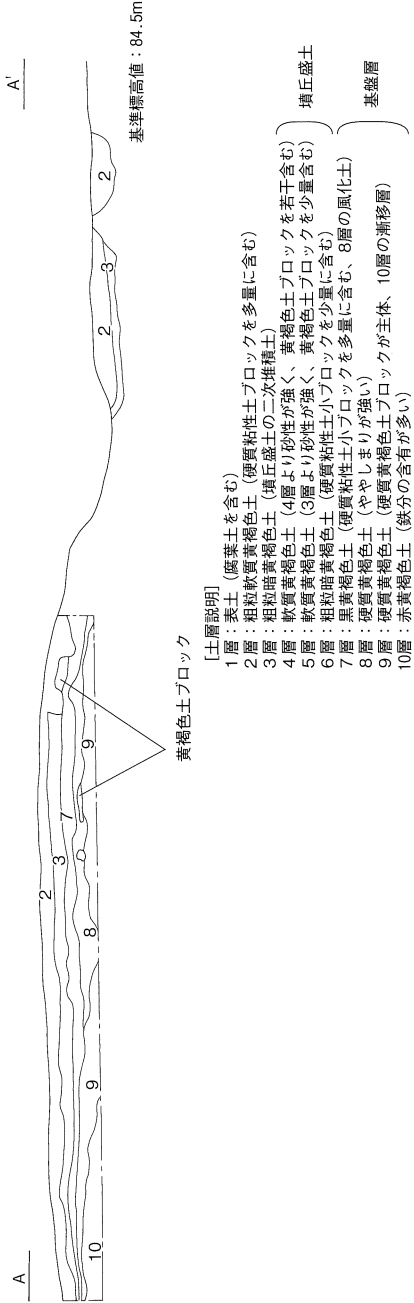
第110図 上中尾地区岡1号墳測量図(完掘時)(1/200)



第111図 上中尾地区トレンチ1.2 土層断面図 (1)



第112図 上中尾地区トレンチ1.2 土層断面図 (2)



第113図 上中尾地区調査区西端部土層断面 (道路断面)

トレンチ7は古墳西側の平坦面に設定した。地山の直上に0.3~0.4mの厚さで流入土の堆積がみられた。

トレンチ8は墳丘の西部に設定した。盛土及び墳丘端部を確認したが、周溝はみられない。

トレンチ9は墳丘の北西部に設定し、墳丘端部の確認を行ったが、盛土が流失し、明確でなかった。

トレンチ10は墳丘の北西部に設定した。隣接するトレンチ9では不明確だった盛土及び墳丘端部を確認した。周溝はみられなかった。

トレンチ11はトレンチ9に接して南西方向へほぼ等高線に沿って設定した。表土層は薄く、直下に基盤層がみられた。

トレンチ12から14は古墳周辺に設定した。3本のトレンチでは、古墳に関連する土層の堆積や遺構はみられなかった。このうちトレンチ13は古墳の位置する丘陵の北側傾面にあたり、浅い道状のくぼみを確認した。

このように墳丘は地山を成形した上に盛土を薄く積み上げた比較的軟弱なものであった。墳頂部までの高さは周溝側の裾部から約1mと低く、旧地形の丘陵起伏との差が顕著ではなく、低位の墳丘形態を呈している。古墳築造に伴う周辺部の整地については、墳丘に隣接する西側、北東部の尾根部に対して意識的に実施されたと考えられる。西側の平坦面は墳裾部から幅7mで緩やかに西へ傾斜し、7mほどで生活道路に切断されるが、この付近が丘陵の傾斜変換点となる。北東部の平坦面は周溝外から幅7m~9m、長さ10mの範囲で形成されている。この平坦面を作ることによって、低い墳丘の独立性が視覚的に顕著となる効果をもたらしている。

外表施設として、葺石や外護列石などは確認されていない。

(2) 周溝 (第110図)

周溝はトレンチ調査で確認したように、北東部1/4の丘陵平坦面にあたる14mほどが残る。幅は3.4m、深さ0.2m~0.4mである。周溝は全周しないことから、墳丘を丘陵と独立するために設けられたものと考えられる。なお、墳丘南西部の溝状の遺構は出土遺物もなく、後世の道と重なるため、構築時期が明らかでない。丘陵の斜面裾部から北西の谷に向かって伸びており、排水機能をもつと思われる。

(3) 主体部 (第115図・第116図)

主体部は墳丘の築成が完了した後、墳丘頂部から掘り込み、掘形を形成し、石棺を据えて埋葬後、埋め戻しを行っている。

墓壇の掘形は、石棺と北東隅及び南辺部を試掘トレンチや後世の攪乱等で大きく掘削されているが、残存部分から復元すると長辺3.6m~3.8m、短辺約2.5mの規模をもち、底面までの深さは、現墳頂部から1.04mあり、地山を0.54m掘り込んでいる。壁は石棺の平面プランに向かって緩やかに傾斜する。平面形態は石棺の平面形に沿っているが、やや東側に偏した長方形を呈す。主軸方位は北79度東を指向する。

石棺は側石と小口石を組み合わせた構造をもつことを観察できるが、遺存状態はあまりよくない。内部は長さ1.55m、幅1.6mである。また、石材は地山から0.1m前後の深さで掘削した溝状の掘込みに据える構築方法をとっている。

東側小口部は頭位と考えられる。一石と思われるが、長さ0.5m程残り、厚さ0.13mである。右端は西側石との接する部分を欠失している。右側の残存部分2/3は石材の基部が残る程度で上部は遺存しない。左側は下半部約0.4mが残っており、左端部は東側石のほぞに組み合っている。この東側小口石に特徴的なことは、下辺に水平の刻線が引かれていることであり、床面を形成する際の区画線と考えられる。

西側小口部は足部側と想定される。石材の基部がほぼ中央部に0.4m程遺存するのみである。

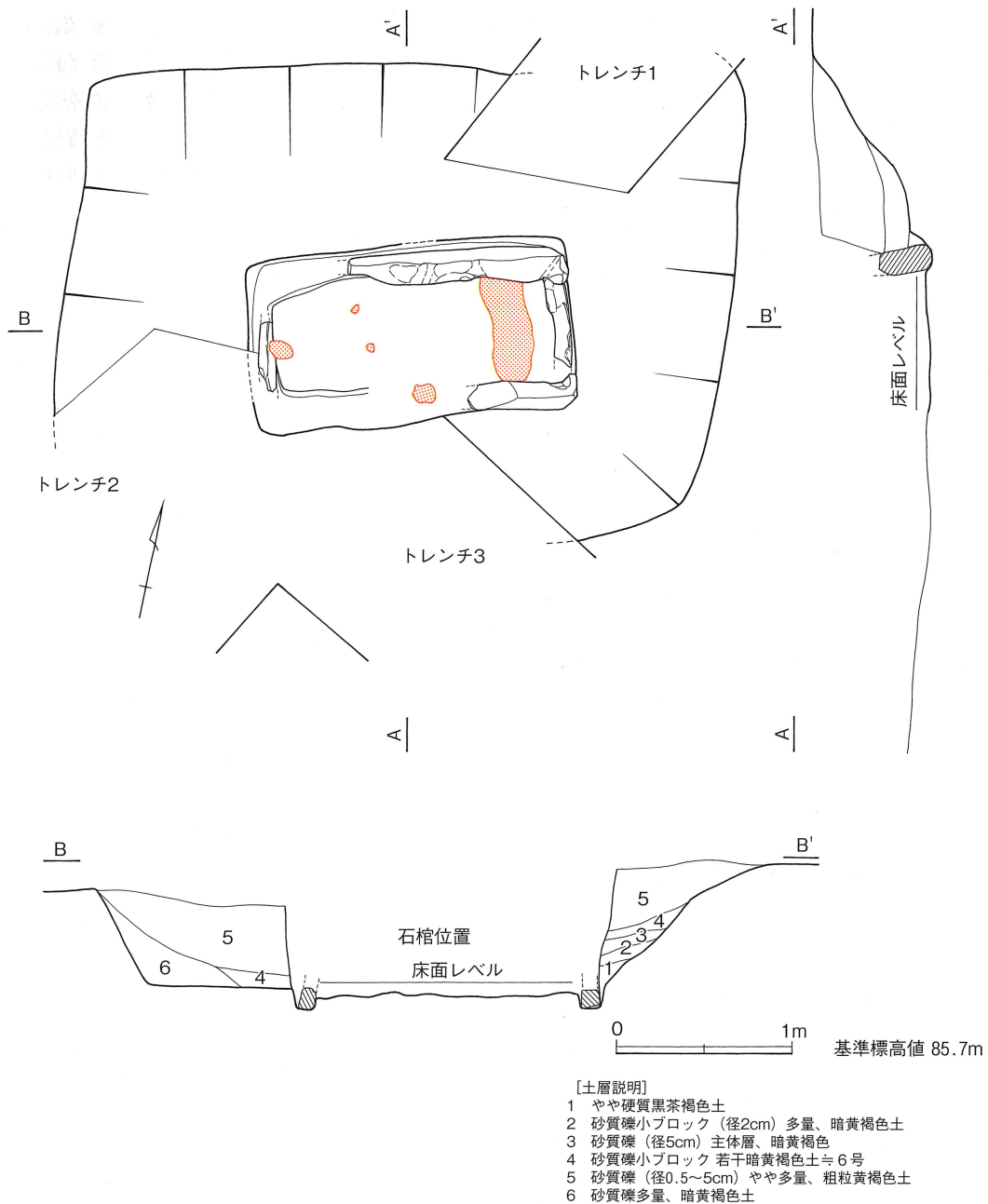
側石は、北側石が東端部から2/3、南側石は東端付近が残る程度で遺存状態はよくない。

北側石は西端部付近を欠き、1.25m程遺存する。高さは東端部付近がほぼ旧状に近いと考えられ、高さは床面から約0.5m、基底面から0.75m、厚さは0.14mである。内面は平滑に仕上げられており、東端部付近には幅0.02m～0.03mのノミ跡が右上方向に残る。また、赤色顔料が東端や中央部に部分的に残っている。また、側石底部の整形は長辺に対して斜方向に幅約0.03mのノミ痕が整然と残り、平坦に仕上げられている（第116図）。

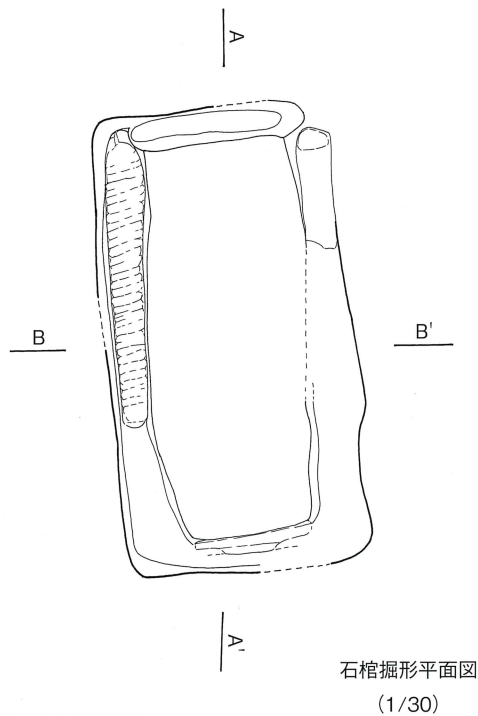
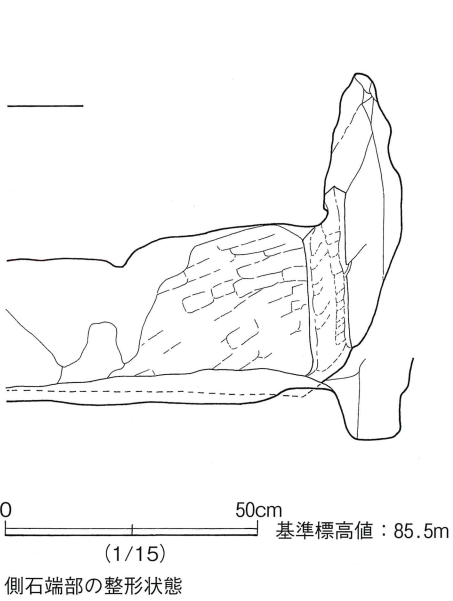
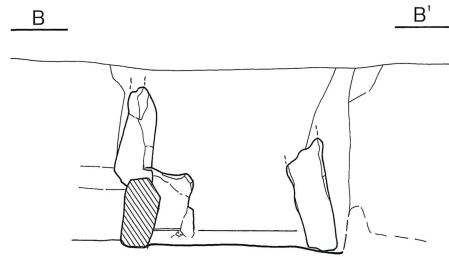
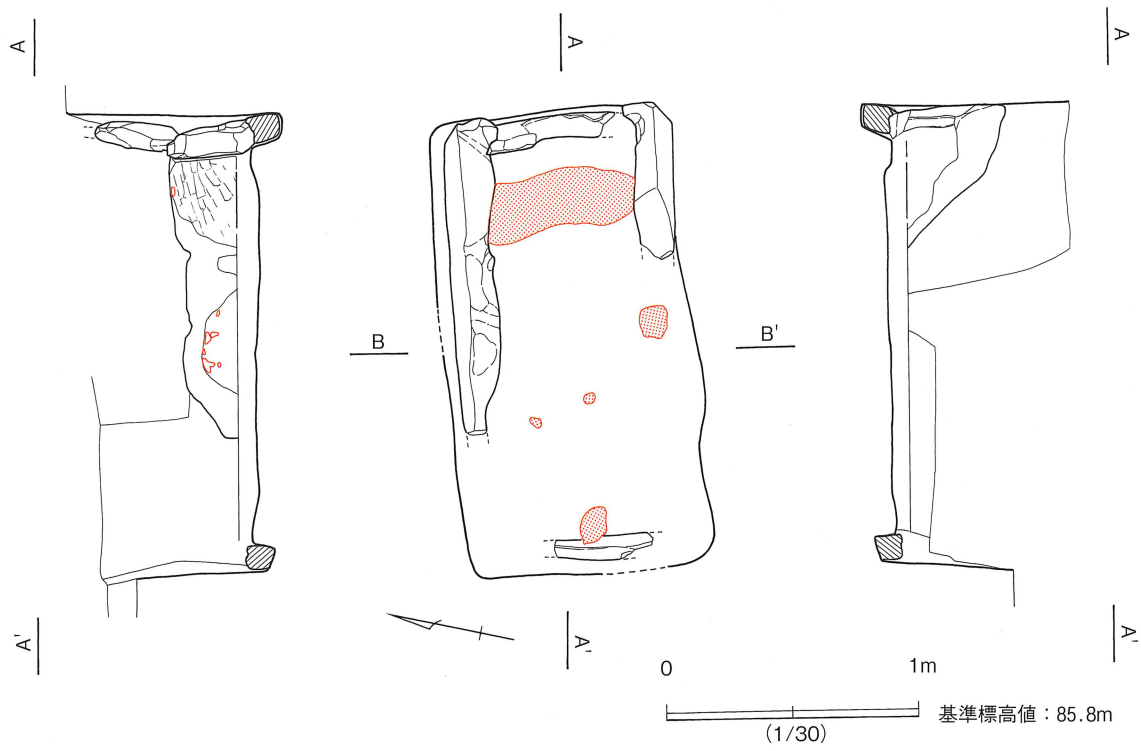
南側石は残りが悪く、東小口部に近い部分が0.55m程残る。高さは床面から0.3m、基底面から0.57m程を確認した。石材の大半を欠くため、一石であるのか不明確である。

残存する小口部は内側に約8～15度程傾斜する。

床面は、東辺部を除く大半が攪乱等で削られ構築時の状態は大きく欠失し、岩盤が露呈していた。床面が残存する東辺部では、石棺幅で長さ0.22m～0.25mの範囲に砂利敷きの上に赤色顔料が残っていた。西半部では部分的に顔料が点在する状況であった。従って、床面には全体に砂利を敷き詰め、赤色顔料を塗布したものと考えられる。



第115図 上中尾地区岡1号墳主体部実測図 (1/40)



第116図 上中尾地区岡1号墳石棺実測図

残存する顔料上面の高さは標高85.05m付近であり、ほぼ床面高さと推定される。
石棺材は砂質凝灰岩で、脆弱な部材である。

(4) 出土遺物

出土遺物は副葬品などの遺物が残っておらず、周辺からも古墳と直接的な関係をもつ遺物は発見されなかった。ただ、墳丘盛土内から土師器の細片が数点出土した。

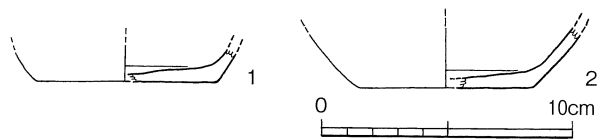
(5) その他の遺構 (第118図)

1号土坑

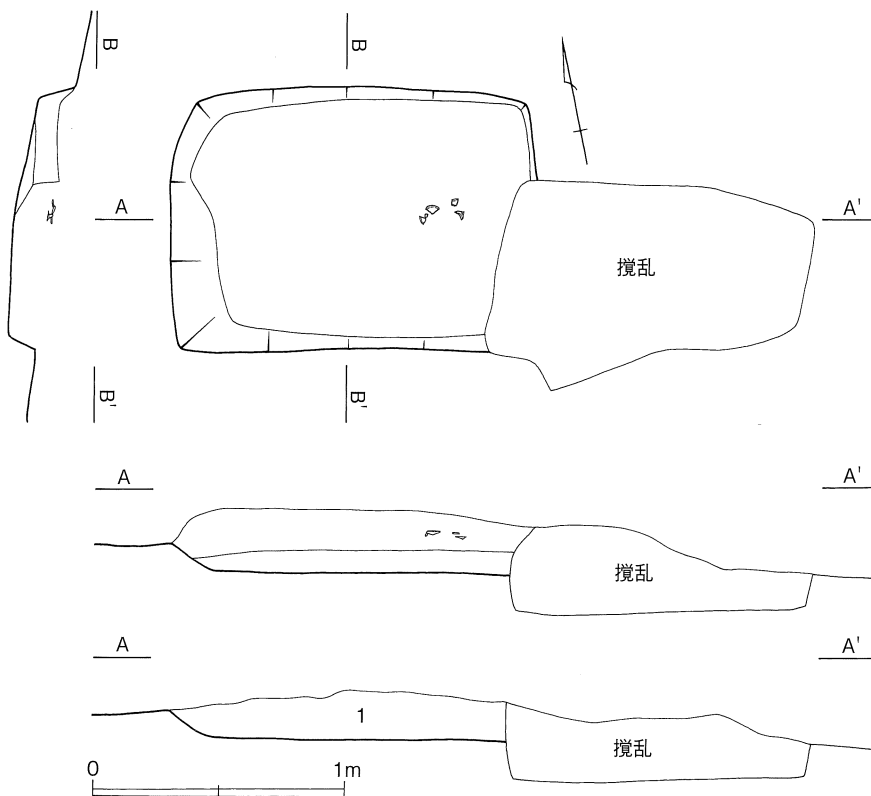
墳丘南東裾部付近に位置する。土坑は長さ1.45m、幅1.03m、深さ0.09m~0.16mの規模であり、南東隅付近を攪乱で失っているが、長方形を呈する。底面はほぼ平坦である。底面東壁寄りに中世の土師質皿の破片が出土している。土坑内の覆土は、黄褐色粘土ブロックを含む粘質暗褐色土であった。

出土遺物 (第117図)

1は1号土坑、2は周辺から出土した土師器の底部付近1/2個体である。1は底部に回転糸切り痕が残り、2はナデが施されている。ともに胎土に砂粒は少なく、焼成は良好、色調は淡橙色である。



第117図 上中尾地区1号土坑及び周辺部出土遺物実測図



[土層説明]

1 暗褐色土層

基準標高値：84.2m

第118図 上中尾地区1号土坑実測図 (1/30)

3 南地区の調査

南地区は古墳の所在する丘陵から南へ伸びる尾根の平坦面にあたる。遺構は竪穴遺構1基、住居跡2基、土坑2基などが所在した。

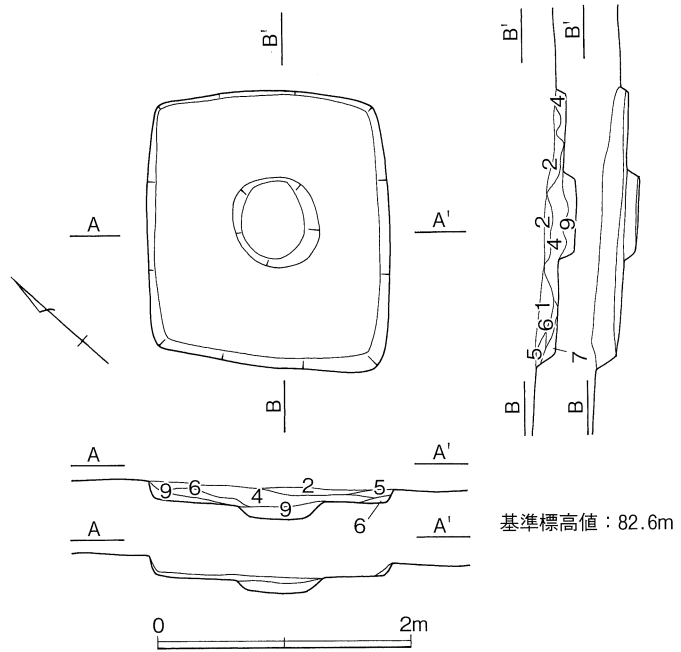
(1) 竪穴遺構、住居跡 (第119図～第121図)

1号竪穴はこの地区の最北に位置する。2.3m×1.93m、深さ0.1m～0.15mの方形を呈し、壁は直立気味に立ち上がる。床面中央部に径0.65m～0.75m、深さ0.1m前後の円形ピットがある。土坑内の覆土は、9層に区分でき、1層は緻密で粘性の弱いやや硬質の茶褐色土、2層は地山の明茶褐色土ブロックを若干含む暗茶褐色土、3層は粘性に強い茶褐色土、4層は暗褐色土、5層は砂粒を少量含む茶褐色土、6層は砂粒を少量含む暗褐色土、7層は砂粒を少量含む暗黄褐色土、8層は鉄分を含む茶褐色土、9層は粘性の暗茶褐色土であり、自然堆積を示していた。出土遺物はなく性格が不明である。

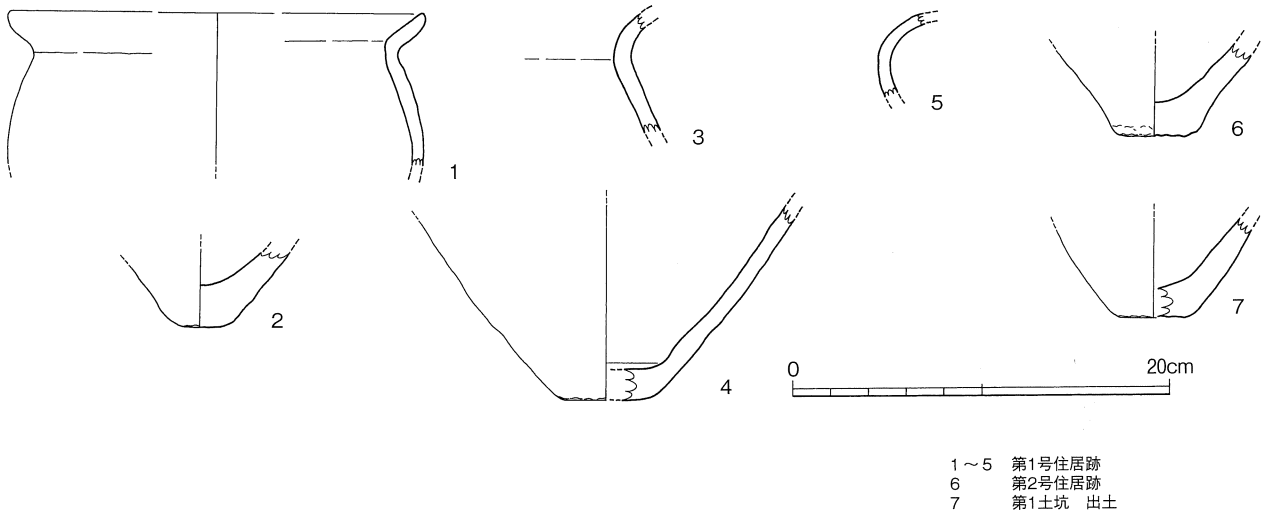
1号住居跡と2号住居跡は重複しており、平面形や覆土の状態から1号が2号に先行して造られたと考えられる。

【土層説明】

- 1層：砂性茶褐色土
- 2層：混茶褐色土ブロック、暗茶褐色土
- 3層：粘性茶褐色土
- 4層：暗褐色土
- 5層：茶褐色土
- 6層：緻密な茶褐色土
- 7層：暗黄褐色土
- 8層：混小礫少量、茶褐色土
- 9層：粘性暗茶褐色土

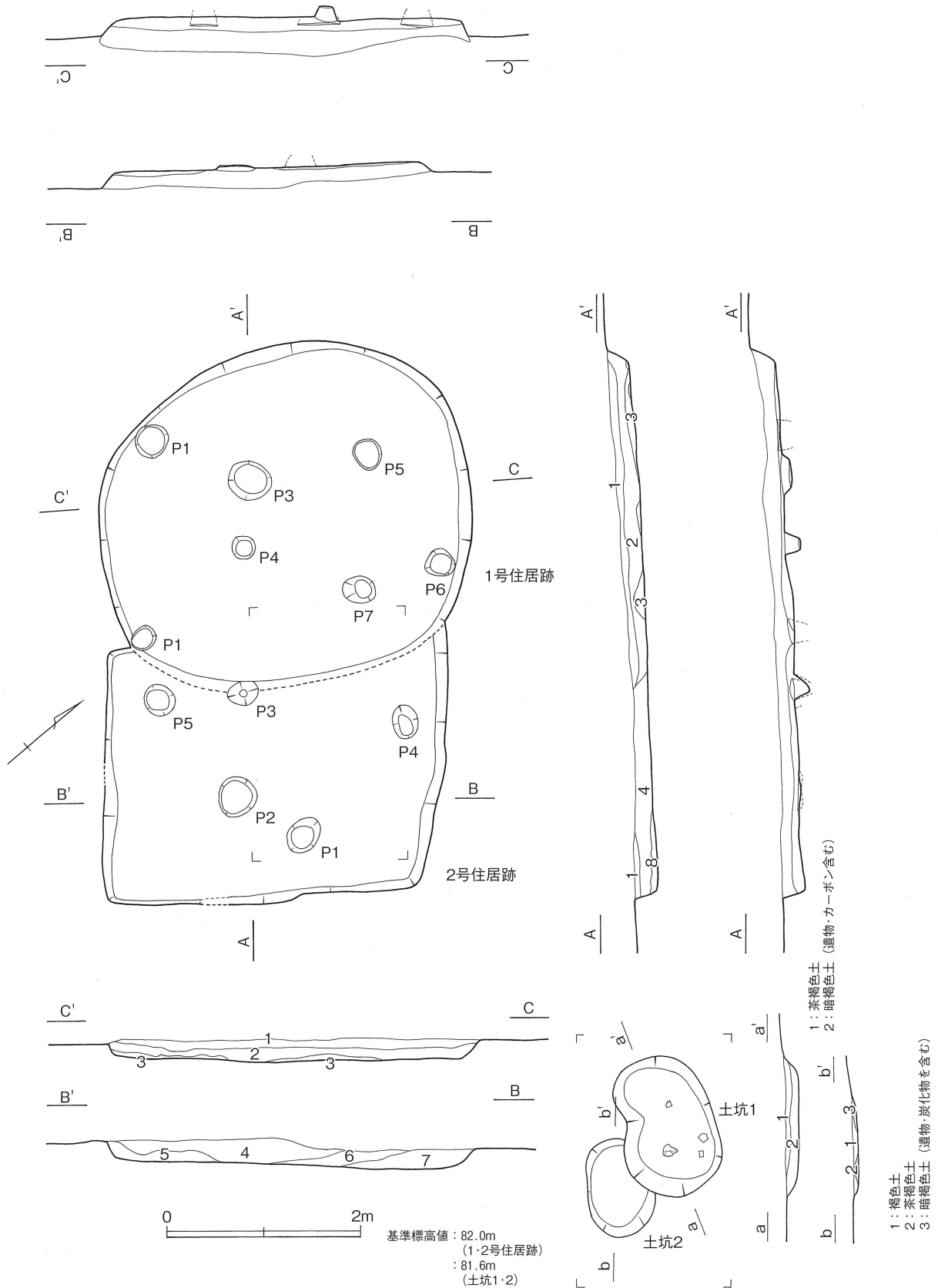


第119図 上中尾地区1号竪穴実測図 (1/60)



- 1～5 第1号住居跡
- 6 第2号住居跡
- 7 第1土坑 出土

第120図 上中尾地区1号土坑及び周辺部出土遺物実測図 (1/4)



【土層説明】

- 1：褐色土。粘性弱く、しまり強い。
 - 2：暗褐色土。粘性やや弱く、しまり強い。鉄分を多く含有し、微細な礫を少量混入する。
 - 3：褐色土。粘性やや強く、しまりやや弱い。地山ブロックを少量混入する。
 - 4：暗褐色土。粘性弱く、しまりやや強い。炭化物粒子を微量含有する。地山ブロックと微細な礫を少量混入する。色調は5層より若干暗い。
 - 5：褐色土。粘性やや強く、しまり弱い。地山ブロックを少量混入する。
 - 6：褐色土。粘性、しまり共にやや強い。炭化物粒子をわずかに含有する。
 - 7：明黄褐色土。粘性、しまり共に強い。地山を主体とする層である。
 - 8：黄褐色粘質土
- 1号住居跡覆土
- 2号住居跡覆土

第121図 上中尾地区1・2号住居跡、土坑1・2実測図 (1/60)

1号住居跡は長径3.9m、短径3.5m、現存壁高0.2mで、平面形は南北にやや長い円形を呈する。床面は平坦であり、径0.25m～0.45mのピットが7確認されている。柱穴はピット4・5の可能性が高い。覆土は上層から1層が弱粘性褐色土、2層は小礫を微量含む暗褐色土、3層は最下層で地山の黄褐色土ブロックを含む褐色土である。覆土内から弥生後期の土器が出土している。

2号住居跡は2.8m×3.3mの北にやや長い方形を呈する。現存壁高0.2mで、床面は平坦である。床面にピットが5確認されているが、柱穴配置は不明確である。覆土は上層から4層が炭化物微量混入の弱粘性暗褐色土、5層は黄褐色土ブロック・小礫を微量含む褐色土、6層は炭化物微量混入の褐色土である。7層は最下層で地山の黄褐色土ブロックが主体層である。

(2) 土 坑 (第121図)

2基の土坑は2号・3号竪穴を切って構築されている。

1・2号土坑は1・2号住居跡の重なる部分に位置する。2基の土坑は重複し、2号、1号の順で構築されている。1号土坑は不整楕円形を呈し、長径1.5m、短径1m、深さ0.12mの規模をもつ。主軸方位は北87度西を指向する。覆土は3層に区分でき、1層は粘性の強い褐色土、2層は茶褐色土、最下層の3層は暗褐色土で弥生土器片を含む。2号は北辺部を1号に切られている。長径1.5m、短径1m、深さ0.12mの規模をもち、楕円形を呈す。主軸方位は北50度西を指向する。覆土は3層に区分でき、1層は黒褐色土で弥生土器片を含む。2層は黄褐色土、最下層の3層は暗褐色土である。

(3) 出土遺物 (第120図1～7)

甕類の細片が多く出土しているが、実測可能な7点を図示した。1～5は第1号竪穴、6は第1号住居跡、7は第1号土坑から出土した。1は甕の口縁部から胴上半部1/6である。胎土に白色砂粒・石英粒を含む。焼成は良好で明褐色を呈する。口縁に指ナデが施されている。2は壺の底部破片でやや尖り気味の形態を示す。器面にはナデ調整が施されている。胎土に角閃石・長石粒を含む。焼成は良好で黄橙色を呈する。3は壺頸部破片である。胎土に角閃石・石英粒を含む。焼成は良好で橙色を呈する。器面にはナデ調整が施されている。4は甕の底部で1/3が残り、平底状をなす。胎土に角閃石・石英粒を含む。焼成は良好で橙色を呈する。器面にはナデ調整が施されている。5は甕の頸部破片である。胎土に石英粒・白色砂粒を含む。焼成は良好で橙色を呈する。器面にはナデ調整が施されている。6は甕の底部で、平底状をなす。胎土に角閃石・石英粒を含む。焼成は良好で橙褐色を呈する。器面にはナデ調整が施されている。7は甕の底部で1/3が残り、平底状をなす。胎土に角閃石・石英粒を含む。焼成は良好で橙色を呈する。器面にはナデ調整が施されている。土器の時期は器形の特徴から弥生時代後期前葉にあたる。

なお、7は土坑覆土から出土しているが、住居跡からの流れ込みと考えられる。

4 小 結

岡1号墳は低位の墳丘をもつ小規模な古墳である。主体部は組合式石棺で砂質凝灰岩を棺材としている。時期は石棺の特徴や使用石材等から5世紀前半代が考えられる。

南地区の1・2号住居跡は遺存状態があまりよくなかったため、住居としての内容を詳細に確認することができなかったが、遺構の形態や遺物の出土状態等から住居跡と考えた。



空中写真 手前が岡2号墳 奥が岡1号墳（南東方向から）



空中写真 岡1号墳（南上方向から）



岡1号墳調査前全景（西方向から）



岡1号墳 掘形確認状態（西方向から）



1 周溝外縁部（東端部）



2 周溝・墳丘裾部



3 墳丘盛土（1）



4 墳丘盛土（2）



5 墳頂部・石棺材



6 墳丘盛土

岡1号墳第1トレンチ（北方向から）



石棺全景(1)
(西方向から)



石棺全景(2)
(西方向から)



石棺全景(3)
(南方向から)



石棺東小口部
(西方向から)



石棺材加工状態
(南方向から)



石棺完掘状態
(西方向から)



岡1号墳完掘時
全景
(西方向から)



南地区
調査前全景
(北西方向から)



1号竪穴全景
(南東方向から)



1号・2号
住居跡
(南東方向から)



1号住居跡
全景
(北東方向から)



1号住居跡
完掘時全景
(北東方向から)



2号住居跡
全景
(南東方向から)



2号住居跡
完掘時全景
(南東方向から)



南地区
完掘時全景
(南東方向から)

第6節 林頭地区（岡2号墳）

1 調査の概要

本地区は調査対象地区の南寄りにあり、調査時点では雑木で覆われた山林であった。当該地区では古墳1基と炭窯1基を調査した。

2 古墳の調査

事前に実施した分布調査では墳丘の盛土が低く、丘陵上それ自体との隆起と区別が難しかった。このため、試掘調査は遺物や遺構の検出を目的として、直交するトレンチ2本を設定して行った。その結果、周溝や石棺材の破片を確認し、低墳丘の古墳であることが明らかとなった。墳丘は墳頂付近に石棺材と思われる結晶片岩が多く散在し、主体部は大きく掘削を受けており、遺存状態は不良と推定された。

事業者との協議を重ねたが、現地での保存は困難と判断し、記録保存を目的とした本発掘調査を実施した。

本調査では、まず、試掘調査で設定した2本トレンチを基に、墳丘を十字に直交するように修正し、盛土の土層を確認しながら順次掘り下げ古墳の形態・規模・構造の確認を行い、次いで、主体部の調査を実施した。

調査の結果、古墳は墳径18m、比高1.4mの円墳で、埋葬主体部は箱式石棺である。

（1）墳丘（第122図～第127図）

第122図は調査前の墳丘測量図である。第1トレンチは北西から南東に設定したもので、北半部は墳端外から主体部掘形縁辺まで、南半部は主体部縁辺から周溝外までの範囲である。第2トレンチは北東から南西に設定したもので、第1トレンチと直交する。北半部は墳端外から主体部掘形縁辺まで、南半部は主体部縁辺から墳端外までの範囲である。各トレンチの土層の所見は以下のとおりである。

土層観察では、1層：暗褐色土、2層：茶褐色土、3層：黒褐色土、4層：茶褐色土、5層：暗褐色土、6層：黒褐色土、7層：暗褐色土、8層：茶褐色土、9層：灰褐色土、10層：黄灰褐色土、11層：暗褐色土、12層：明茶褐色土、13層：暗褐色土となる。同一色調の土層は含有砂粒などによって区分した。このうち、1層は表土であり、2・3層は主体部付近にみられる攪乱土である。4層は墳丘盛土で3層に細分できた。5層～7層は基盤層である。8層は炭化物を含む周溝覆土である。

墳丘の形成を土層堆積状況から観察すると、墳丘周辺部を削り出して墳形を大まかに整え、墳頂を中心に東西約6m×南北約5mの不定形範囲に0.2mほど地山層を掘り下げ基底部を作り、その上に4層（3層に細分）を盛土し、墳丘を完成したものと考えられる。

このように地山から形成した盛土は薄く、墳頂部までの高さは1.4mと低い墳丘をなしている。

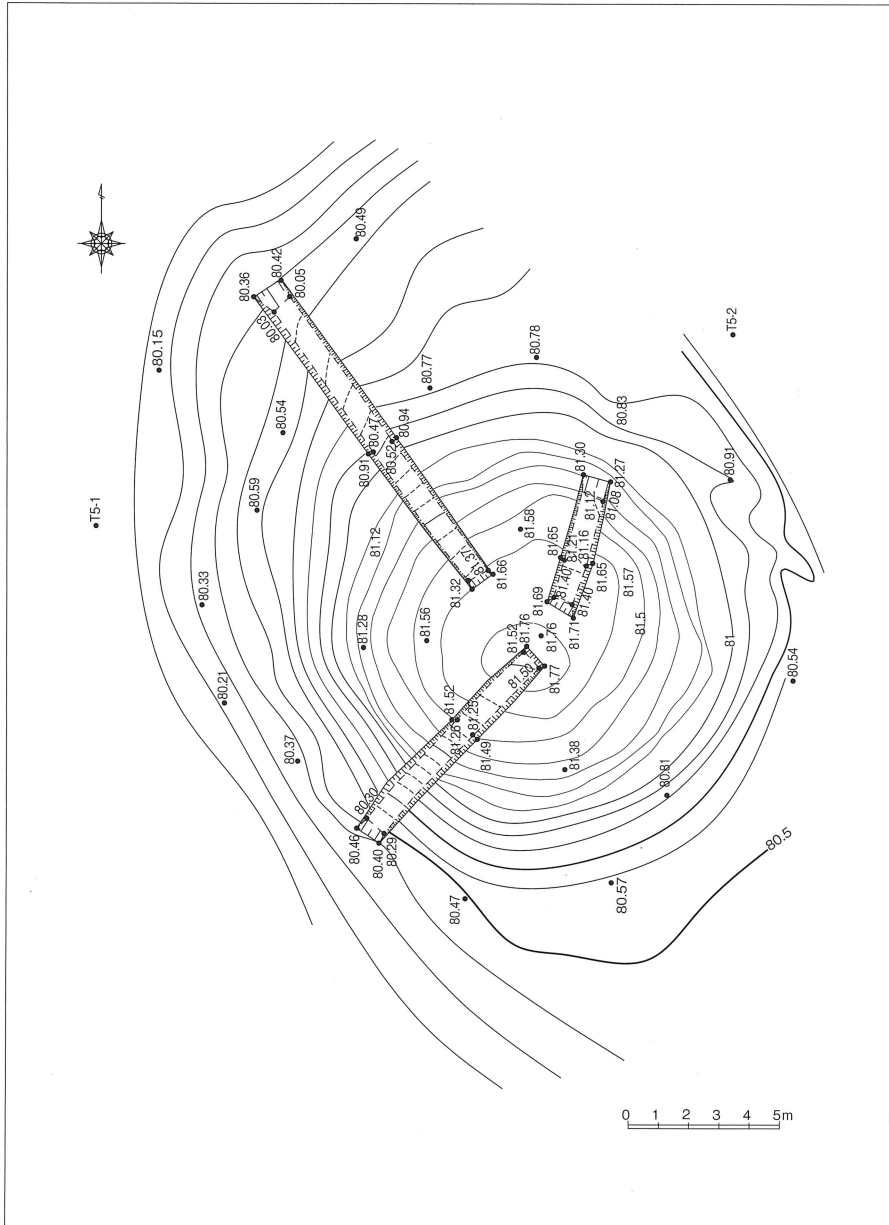
なお、古墳築造に伴う周辺部の整地については、墳丘に隣接する北側と、この丘陵が傾斜する南部の平坦面におよんでいたと考えられる。特に南部の周溝を設けることで、低い墳丘の独立性が視覚的に顕著となる効果をもたらしている。

外表施設

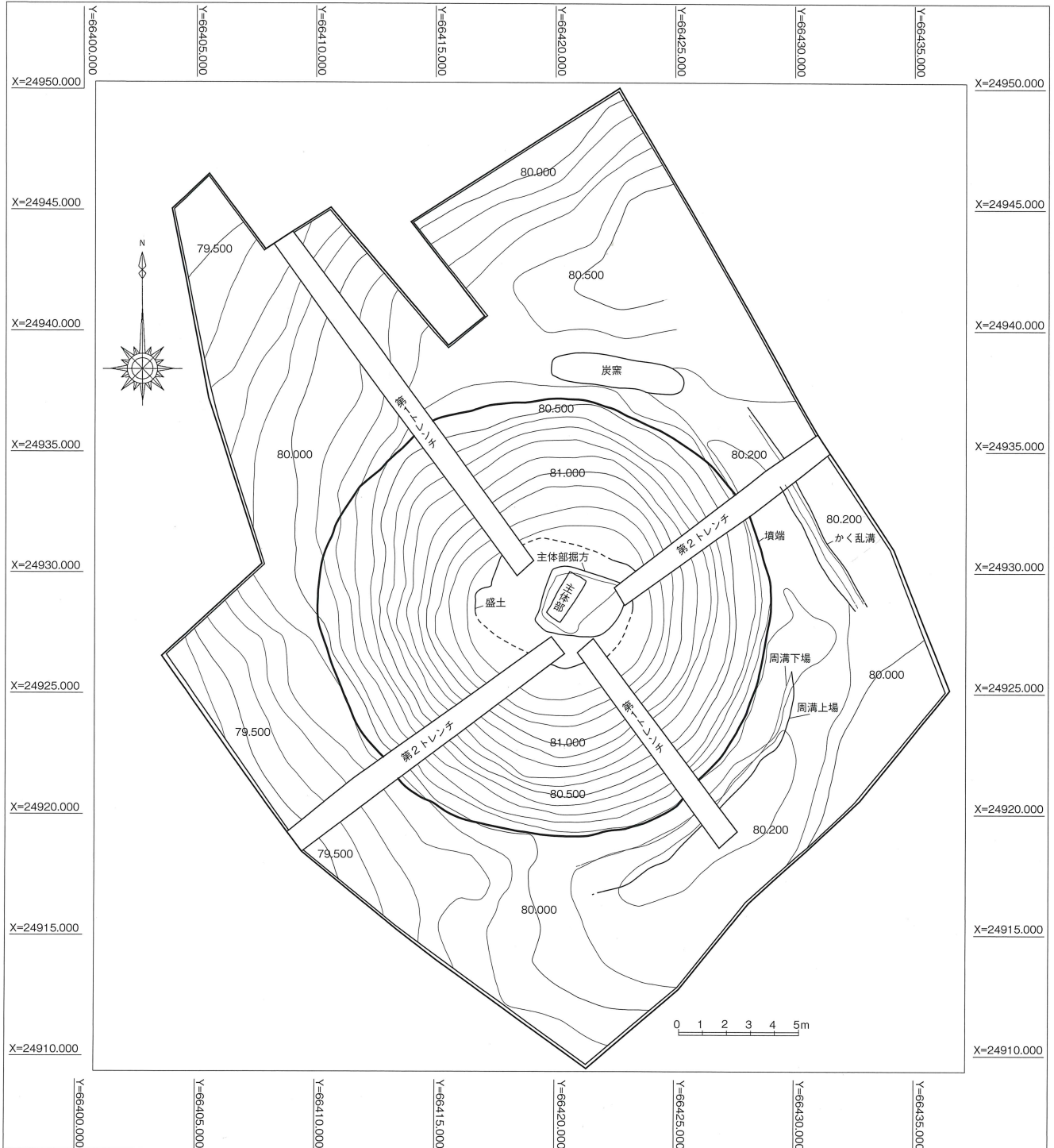
葺石や外護列石などは確認されていない。

（2）周溝（第123図）

周溝は墳丘裾部南東範囲で全体の1/4にあたる13mほどが残る。南端付近では幅は2.5m、深さ0.2m程度を確認した。北端付近では覆土の一部が確認できる程度であった。周溝は築造時においても全周していなかったと考えられ、墳丘を丘陵平坦面から画するために部分的に設けられたものと考えられる。



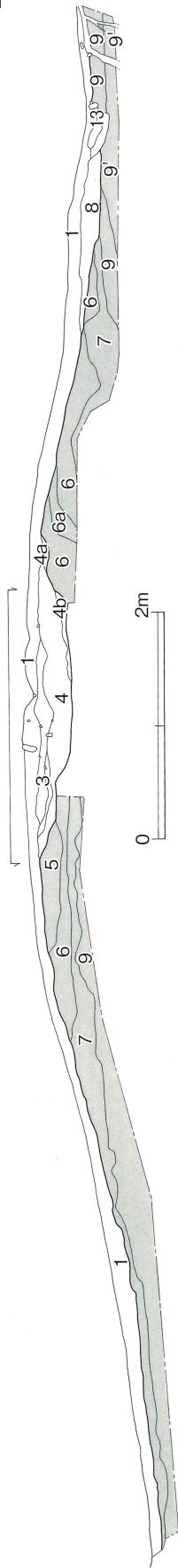
第122図 林頭地区岡2号墳測量図（調査前）（1/250）



第123図 林頭地区岡2号墳測量図（完掘時）（1/250）

W

墳丘盛土残存範囲



第124図 林頭地区東西トレンチ土層断面図

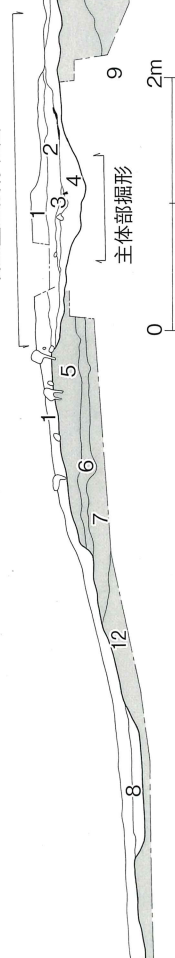
(土層説明)

- 1 暗褐色土層 [表土]
- 2 茶褐色土層 (結晶片岩の破片多数含み、部分的に茶褐色土を含む) [カクラン土]
- 3 黒褐色土層 (結晶片岩と白色粘質ブロック土を含む) [カクラン土]
- 4a 茶褐色土層 (白色粒子を多数含む。やや硬質) [盛土]
- 4b 茶褐色土層 (白色粒子を少量含み、黄色がかつてる) [盛土]
- 5 暗褐色土層 (白色粒子を少量含み、灰色がかつてる) [盛土]
- 6 茶褐色土層 (白色粘質ブロック土を少々含む) [地山]
- 6a 茶褐色土層 (白色粘質ブロック土を多く含む) [地山]
- 7 暗褐色土層 (白色粘質ブロック土を多量に含み、一部に黄褐色粘質ブロック土を含む) [地山]
- 7a 暗褐色土層 (白色粒子を含み、3~5mm大の小石を少量含む。層序的には7につながるが白色粘質ブロック土を含まない) [地山] 東西ベルト西側にだけ有る
- 7a① 7aよりも白色粒子が少ない
- 7a② 7a①よりも白色粒子が少なく、炭化物を少量含む。やや砂質)
- 8 茶褐色土層 (粘質ブロック土で構成される。色調の変化がある) [地山]
- 9 明灰黄色土層 (白色粘質土と茶褐色砂質土が層状となって堆積している) [地山] 南北ベルト北側にだけ有る
- 10 黄灰褐色土層 (白色粒子を含み、砂質) [地山]
- 11 暗褐色土層 (白色粒子を少量含み、橙色粒子を微量に含む) [地山]
- 12 明茶褐色土層 (白色粒子を含む、砂質) [地山]
- 13 暗褐色土層 [新しい溝部分]

第125図 林頭地区東西トレンチ土層断面図 (拡大図)



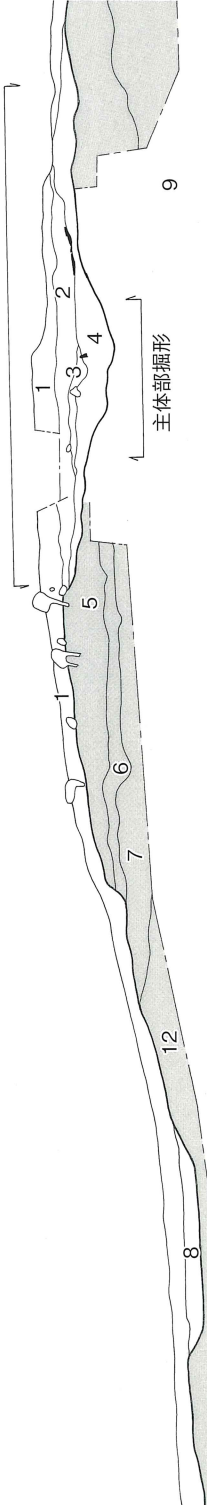
墳丘盛土残存範囲



第126図 林頭地区南北トレンチ土層断面図

S

墳丘盛土残存範囲



第127図 林頭地区南北トレンチ土層断面図 (拡大図)



基準標高値 : 82.0m

(3) 主体部 (第128図、第129図)

主体部は墳丘の築成が完了した後、墳丘頂部から掘り込み、掘形を形成し、石棺を据えて埋葬後、埋め戻しを行ったものと考えられる。

墓壇の掘形は、後世の攪乱等で大きく掘削され、石棺材が散乱する状態であったが基本的な形状は確認できた。平面形態は石棺のプランにはほぼ沿っているが、やや西側に偏した不正方形を呈す。主軸方位は北118度東を指向する。規模は長辺3.3m、短辺2.9m、底面までの深さは現墳頂部から0.9mあり、地山を0.3m掘り込んでいた。

石棺は側石と小口石を組み合わせた箱式石棺である。東側石が比較的良好に遺存するが、他の部位は部分的に痕跡が残る程度であり、全体として遺存状態はよくない。石棺は主体部掘形西辺に寄った位置に据えられていた。残存部等から内法寸法を復元すると、長さ1.8m、幅0.6m~0.7mである。主軸方位は北33度東を指向する。頭位は北と思われる。石棺の構築方法は、石材を基底面に掘削した溝状の掘込みに据え、底面の整地と裏込めを行う方法をとっている。東側石部と南側小口部では、掘形の底面を0.03m~0.05m掘り込んでいるが、北側小口部と西側側石部には、整地層内に石材の下端が留まっている。石棺上端を整えるための下端調整などが想定される。側石は、東側側石部では一石であることが確認でき、長さ1.8m、厚さ0.03m~0.05mである。ほぼ垂直に据えられている。上端部は大きく欠失しており、石材には亀裂が顕著であり盗掘時等において二次的な力が加わったことを示している。西側側石部は石棺材が残っておらず、僅かに基部の掘込を確認するのみであった。

小口部は、北側小口では中央部に基部の掘込を確認したが、石材は遺存していなかった。

南側小口では石棺材が1/2ほど残っていたが、すでに現位置を保つものではなく、内側に傾いた状態で検出された。

床面は大きく攪乱されており、石棺の破片が多く散布していた。底石の敷設はみられなかった。床面の一部には赤色顔料が残っていた。赤色顔料は石材破片にも付着しており、石棺内部に塗布したものと推定される。

石棺から出土した遺物は、鍬鋤先や鉄鏃破片、玉類などであるが、ほとんどが本来の位置を保つものではなかった。ただ、鍬鋤先は石棺内の頭部寄りで床面よりも上位から出土したものであるが、近い位置に副葬されたと考えられる。また、掘形の覆土中から鉄器破片が出土しており、主体部は大きく攪乱されていることを示している。

石棺石材は結晶片岩であった。

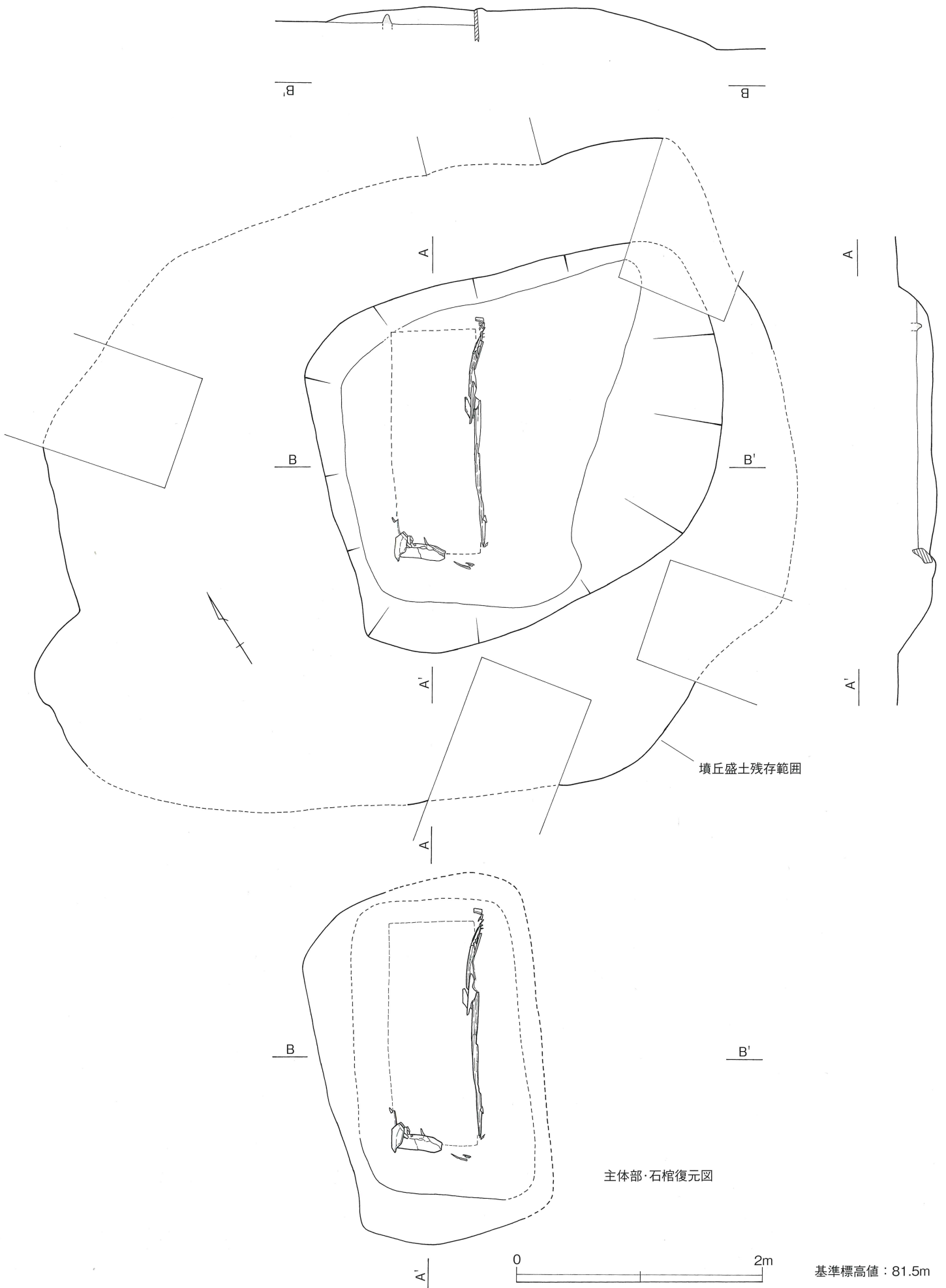
(4) 出土遺物 (第130図)

出土遺物としては実測可能な鍬鋤先、鉄鏃の茎部、小玉の3点を図示した。他に鉄片が1~2点出土しているが図化できなかった。

1は鉄製の鍬鋤先の完形品である。全体的に錆が進んでいたが、ほぼ本来の形状を確認できた。鉄板の両端部を折り曲げて着柄部を作っている。残存長6.2cm、刃部幅9.8cm、着柄部2.3cm、最大幅箇所での鉄板の厚さは0.3cm、着柄部の厚さは0.5cmである。刃部は大半を欠失した状況であるが、残存する左隅の形状から復元すると、本来弧状を呈していたものと考えられる。ただ、現状での刃部付近は薄くなっており、研ぎ減りの可能性も考えられる。着柄部は刃部側が欠損や錆によって不明確であるが、刃部に向かってやや細くなる形状を示している。やや丸みを帯びて折り曲げられている。平面形は方形を呈しており、方形板刃先といえよう。また、大きさはこの形式ではやや小形に属す。(松井和幸「日本古代の鉄製鍬先、鋤先について」考古学雑誌第72巻第3号)

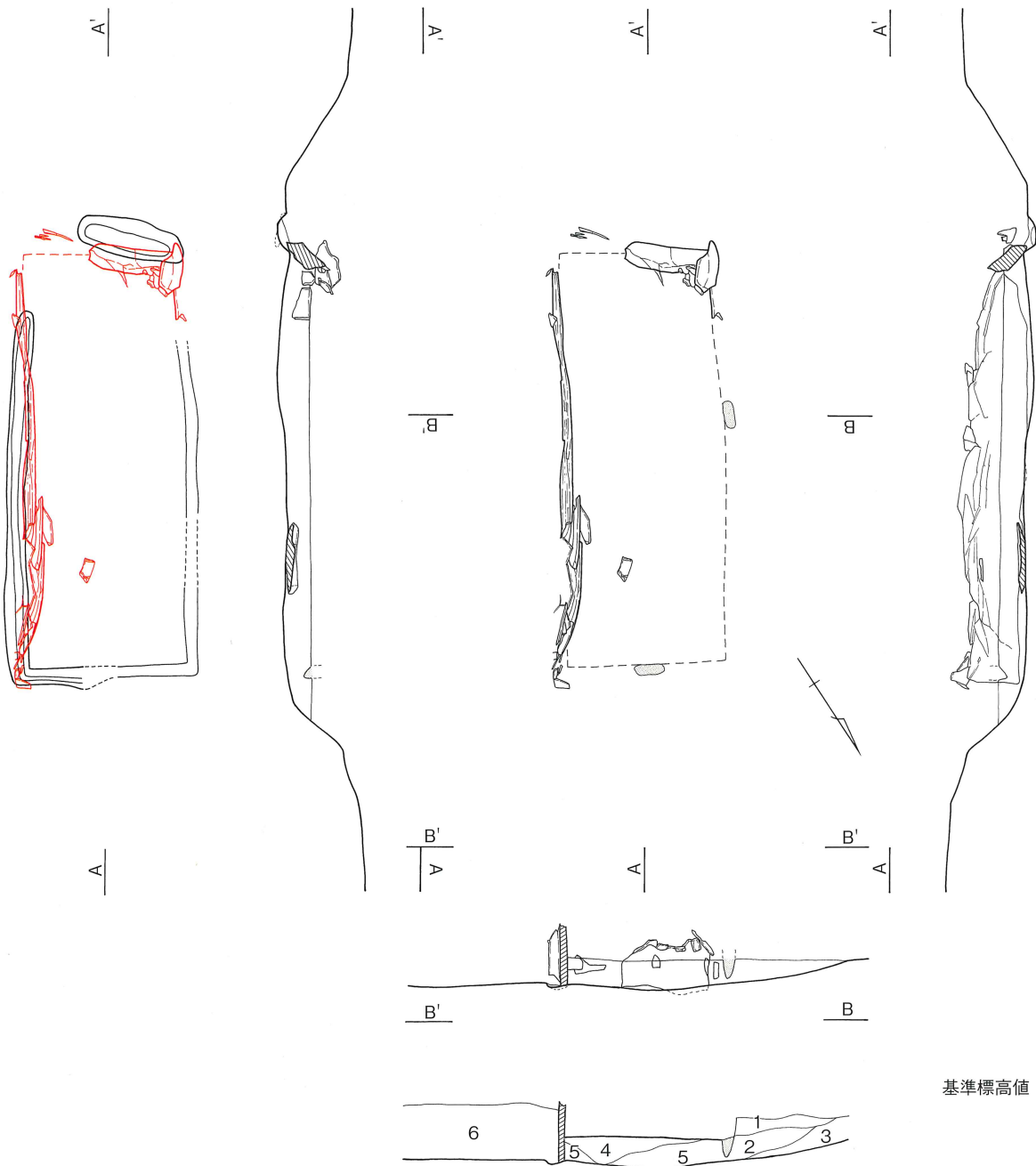
2は鉄鏃茎部の破片である。石棺埋土中から出土した。断面形は5cm×3.5cmの長方形を呈す。

3は滑石製の小玉である。石棺埋土中から出土した。径0.7cm~0.8cmのやや歪な円形を呈す。厚さは0.25cm、0.55cmと一方の端面は大きく傾斜する形状を示す。穿孔は一方向から行われており、孔径は一端面が0.4cm、他の端面は0.2cmである。なお、側面に穿孔を途中で止めた痕跡がみられる。



第128図 林頭地区岡2号墳主体部実測図 (1/40)

石棺掘形



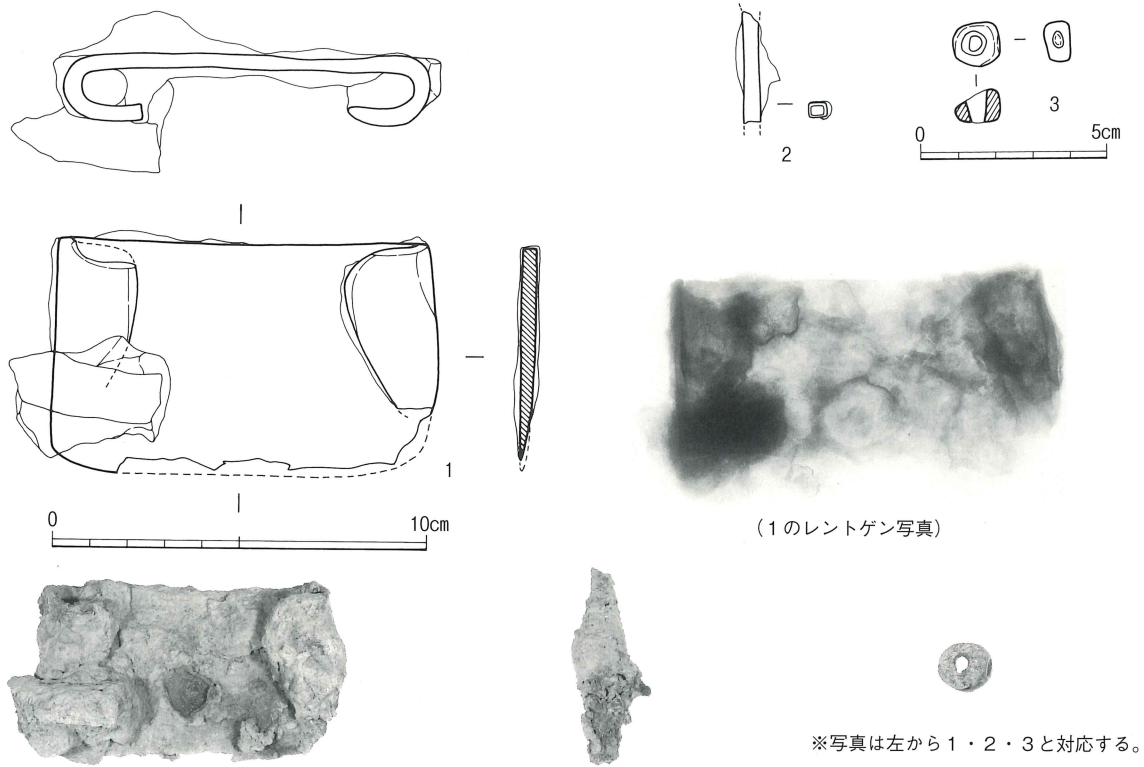
基準標高値：81.5m

〔土層説明〕

- | | | |
|---|------------------------|----------|
| 1 | 混白色粒微量・黄褐色土ブロック、黄褐色土 | 石棺裏込め充填土 |
| 2 | 混白色粒微量・灰色土ブロック多量、灰黄褐色土 | |
| 3 | 褐色土 | |
| 4 | 混白色粒多量、黄褐色土 | |
| 5 | 混白色粒微量、暗黄褐色土 | |
| 6 | 混白色粒多量、硬質茶褐色土 | 墳丘盛土 |

0 1m

第129図 林頭地区岡2号墳石棺実測図 (1/30)

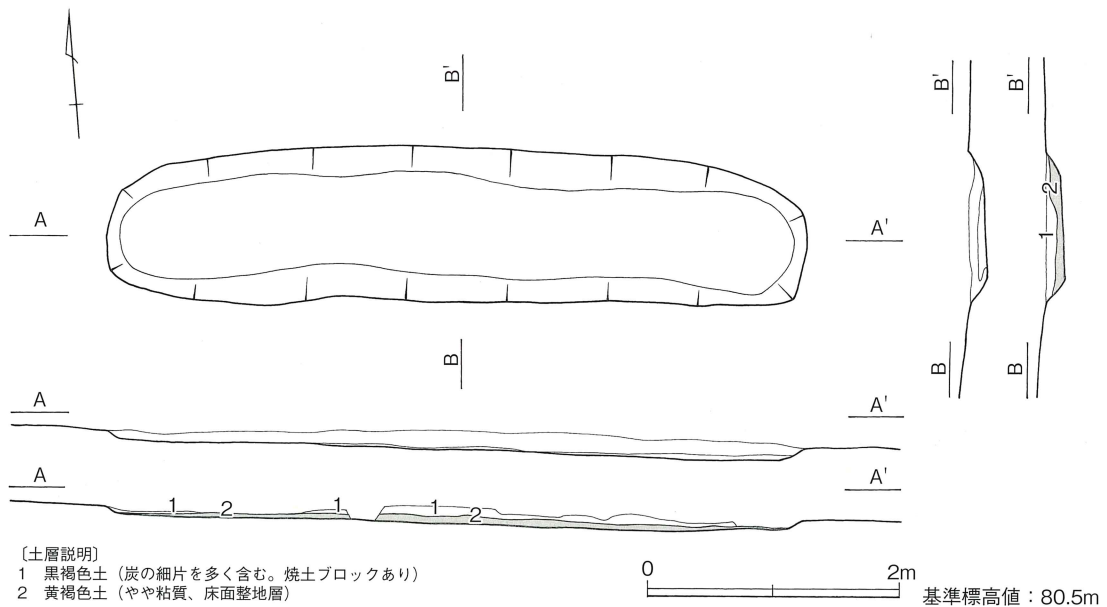


第130図 林頭地区岡2号墳出土遺物実測図（1・2は1/2、3は原寸）

3 その他の遺構

炭 窯

墳丘の北裾部付近に位置する。炭窯は長さ5.52m、最大幅1.21mの長楕円形を呈す。基底までの深さは0.2m程度しか残っていない。窯内では基底面から黄褐色土を0.02m~0.1mの厚さで貼り、窯底を形成している。この上に炭細片、焼土ブロックが堆積していた。壁面の被熱は顕著ではない。



第131図 林頭地区炭窯実測図（1/60）

4 小 結

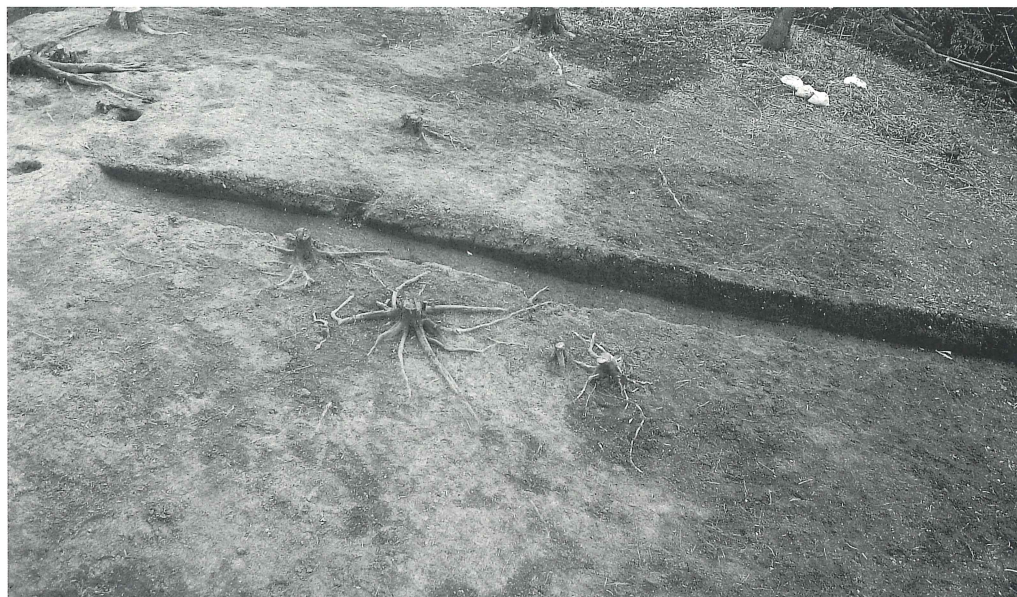
2号墳は幅2.5m程度の周溝が部分的に巡る径18m内外の低墳丘の円墳である。主体部は海部地域に特有の結晶片岩製箱式石棺で、盗掘をまぬがれた遺物として、鉄製鋤、鉄鍬がある、詳細は後章に委ねる。



岡2号墳全景
(南西方向から)



岡2号墳 空中写真



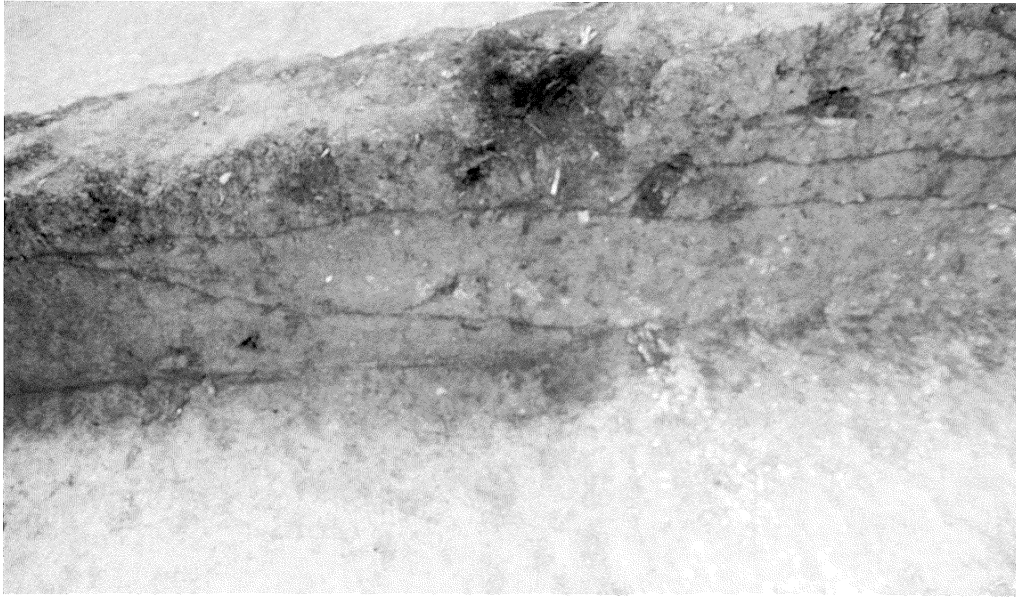
南北トレンチ
土層（部分）



東西トレンチ
土層（部分）



東西トレンチ
土層（部分）



南北トレンチ
土層（部分）



主体部上面の攪
乱された石棺材



検出時の石棺



検出時の石棺



完掘時の
石棺全景



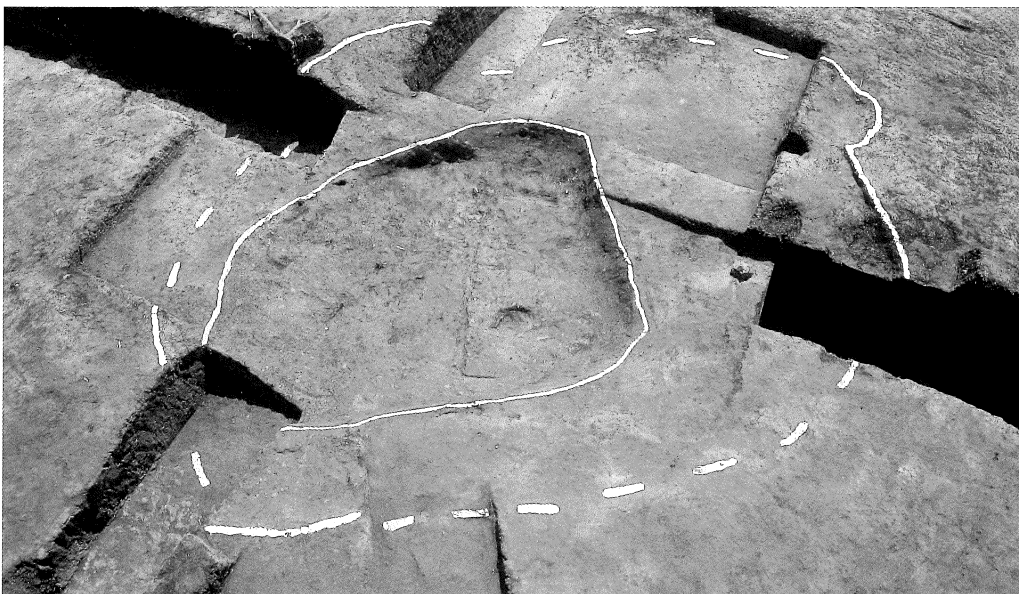
同上



石棺抜き取り痕
(南小口部)



石棺床部
土層



墓壇全景



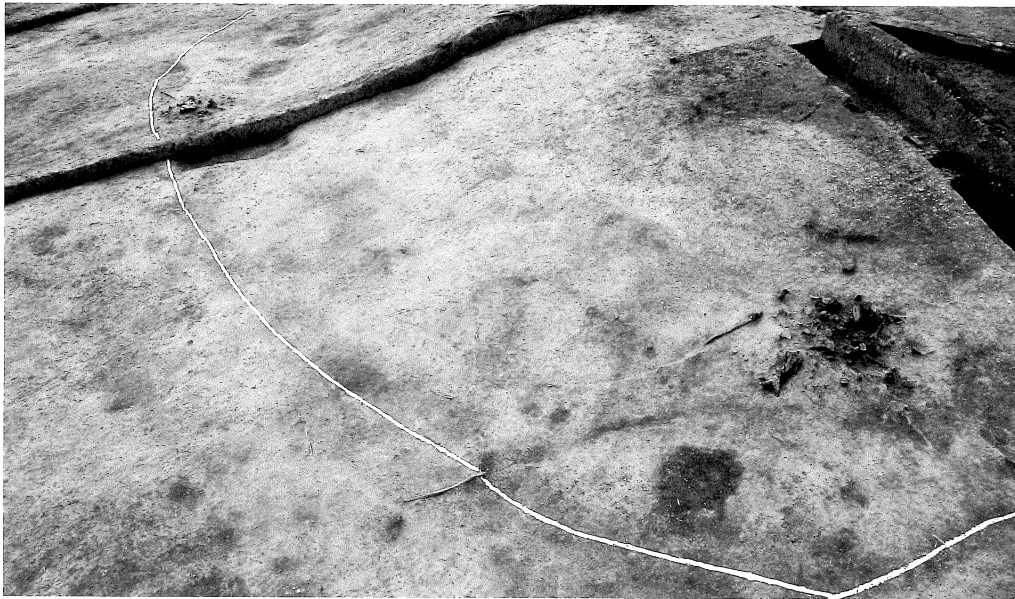
完掘時の墳丘
(北東方向から)



鉄片出土状況



鉄製鋤先
出土状況



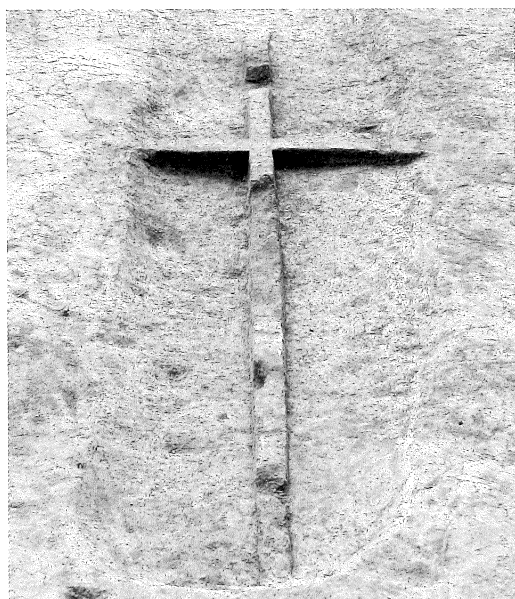
周溝（墳丘南側）



墳丘と炭窯
（画面右上）



墳丘と炭窯
（画面右下）



炭窯



炭窯（完掘時）



墳丘全景
（完掘時）

第7節 善福寺1地区

1 調査の概要

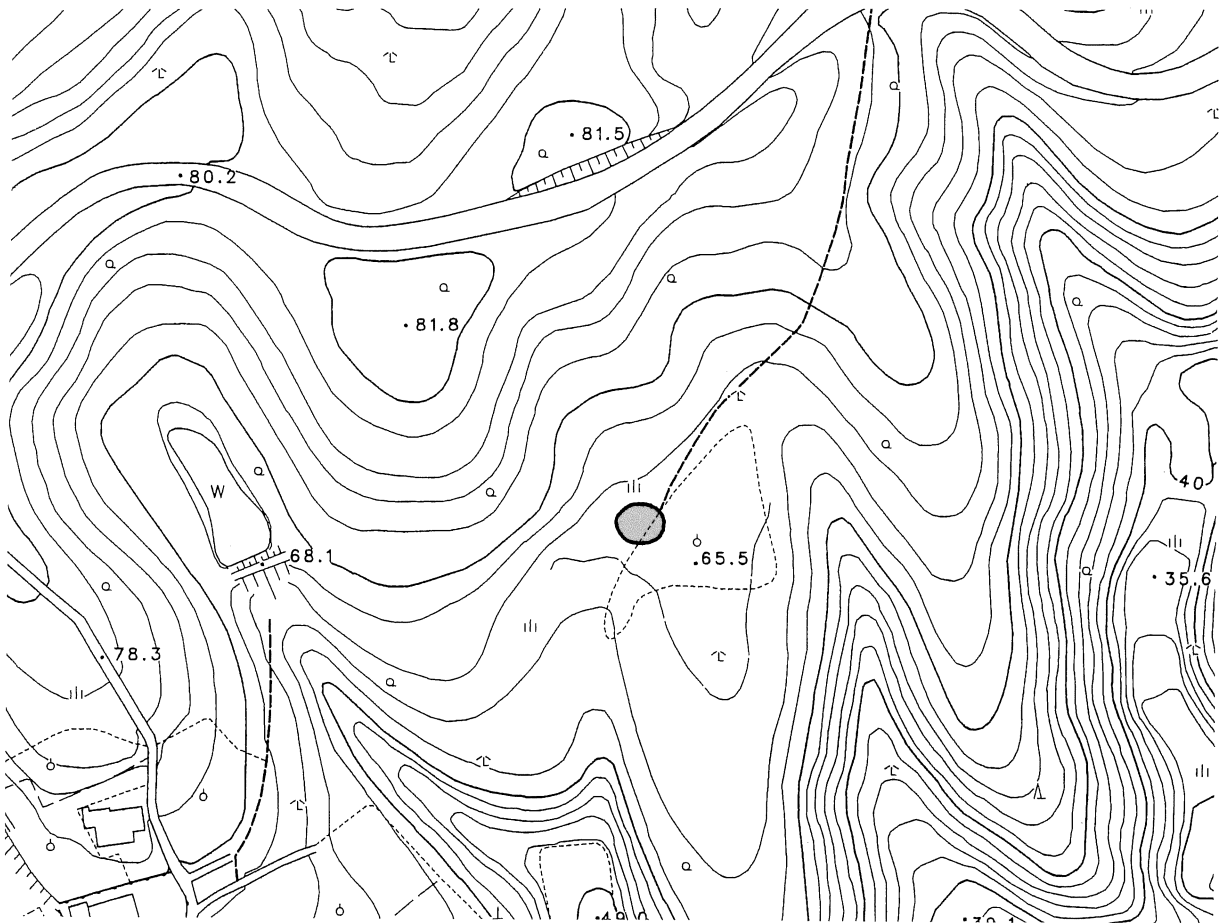
本遺跡は、大分市大字一木字善福寺に位置する。

上中尾地区から内無川3地区に向かい尾根状の丘陵が東西方向にのびる。さらに、その丘陵に直交するかたちで、南側及び北側に丘陵が派生する。本地区は、南側に派生する丘陵上にあり、標高約65mである(第132図)。

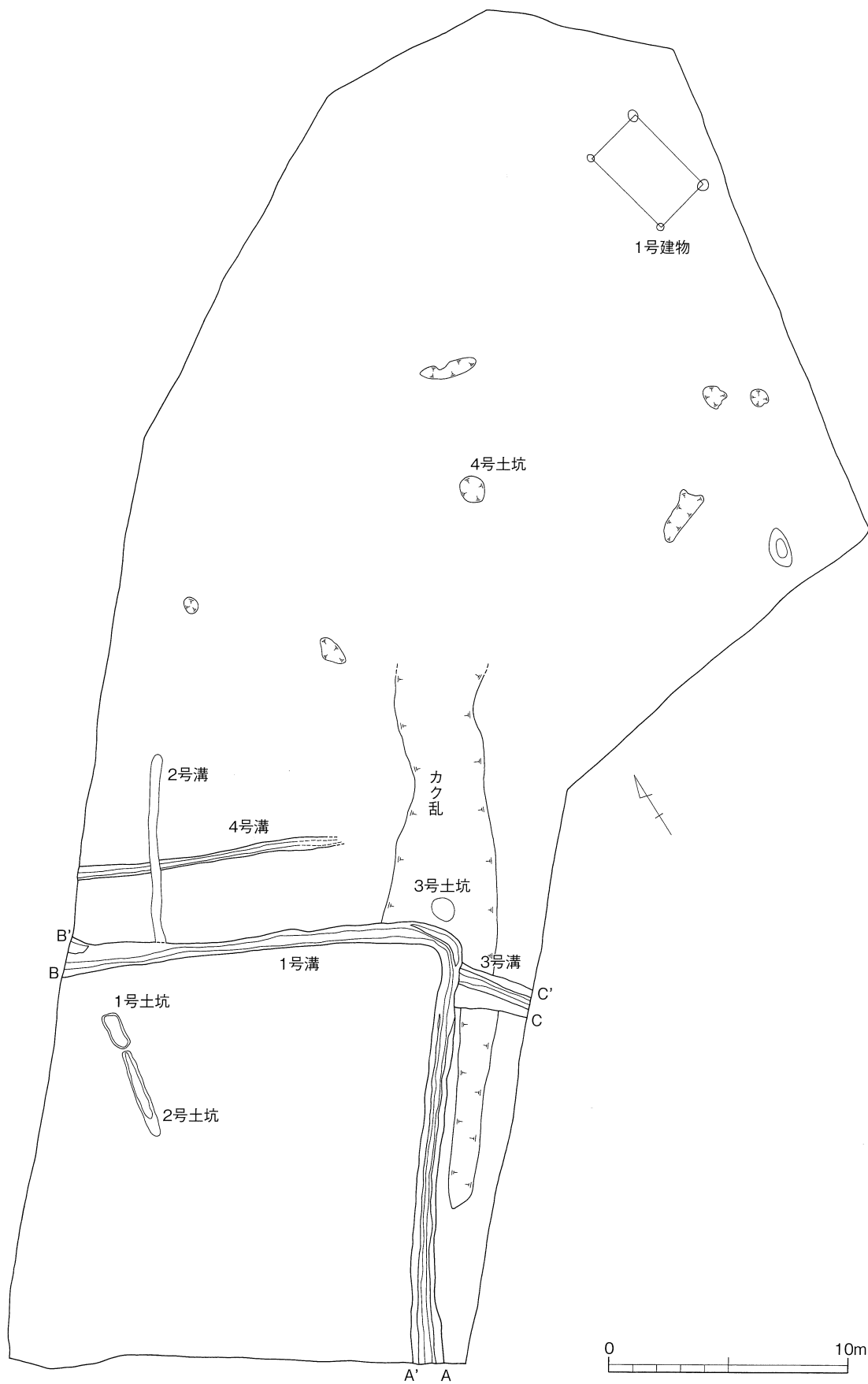
本遺跡の東側には、小谷を隔てて善福寺2地区が位置する。また、北西側には見上げるかたちで林頭地区の岡2号墳がある。

調査前は、調査区を含め一帯に孟宗竹などが密生し、立ち入りさえ困難な状況であった。しかし、一定の平坦面が続く地形を呈することから、試掘調査を実施することとした。その結果、古代に比定される土器片と遺構が確認されたため、調査の必要があると判断した。

調査の結果、ブルドーザーによる削平や攪乱が広範囲でみられた。これは、昭和30年代後半まで耕作されていた畑地の造成等に係わるものであらうと思われる。また、試掘調査時に確認された古代の遺構の広がりもほとんどなく、わずかに土坑が2基検出されたのみである。主たる遺構は4本の溝と若干の土坑で、近世～近代に位置付けられる。また、同様な時期と考えられる掘立柱建物跡が1棟確認された(第133図)。



第132図 善福寺1地区位置図と周辺地形



第133図 善福寺1地区遺構配置図 (1/250)

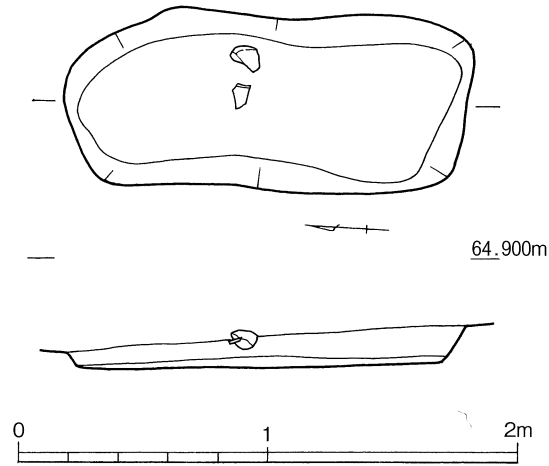
2 古代の遺構・遺物

1 土坑

(1) 1号土坑 (第134図)

1号土坑の埋土は黒褐色を呈し、比較的よくしまる。近世～近代の遺構の埋土とは、色調や土質が明らかに異なる。

土坑は、南北に長い長方形気味の形態を呈するもので、長辺1.6m、短辺0.7m、深さ0.1mを測る。出土遺物は極めて少量で、須恵器の小片が1点出土したのみである。古代の所産と思われる。

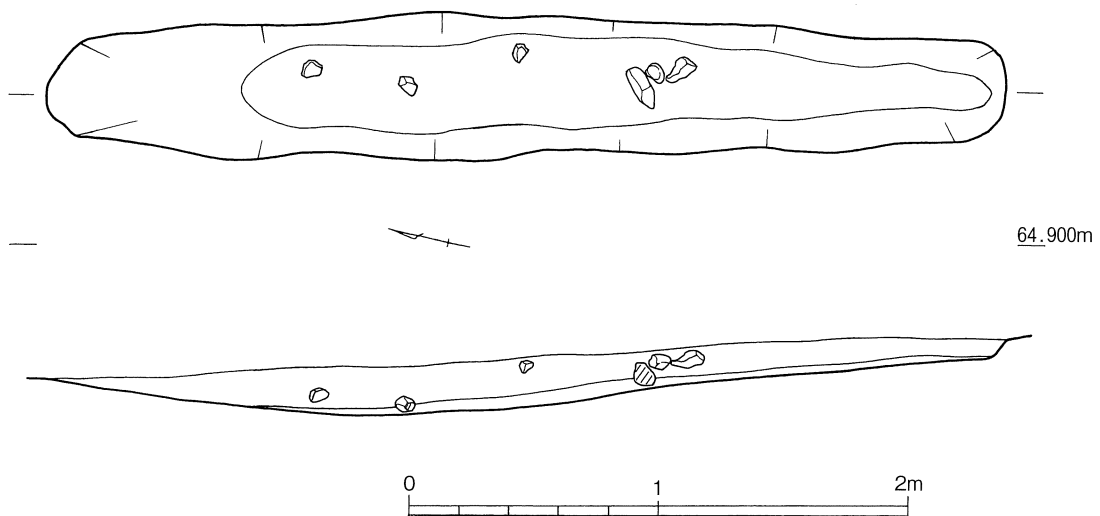


第134図 善福寺1地区1号土坑 (1/30)

(2) 2号土坑 (第135図)

2号土坑は、1号土坑の南側に隣接して位置する。埋土は、1号土坑同様にしまった黒褐色を呈する。

平面形は南北に細長い形状で、長さ3.8m、幅0.5m、深さ0.1mの規模を有する。土坑内からは、小礫が数個出土したのみで、遺物は確認されなかった。しかし、試掘調査時の遺構検出作業の際、本土坑から土師器坏 (第136図1) が出土している。断面方形の低い高台を有するもので、復元底径7.7cmを測る。体部外面にはヘラミガキがみられる。8世紀末～9世紀初め頃のものか。



第135図 善福寺1地区2号土坑 (1/30)



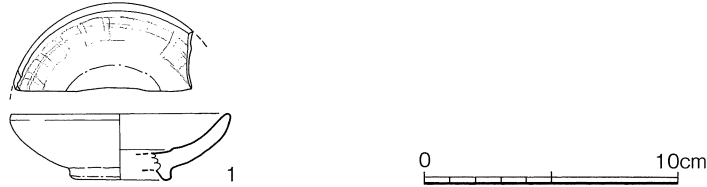
第136図 善福寺1地区2号土坑出土遺物 (1/3)

3 近世・近代の遺構・遺物

1 溝

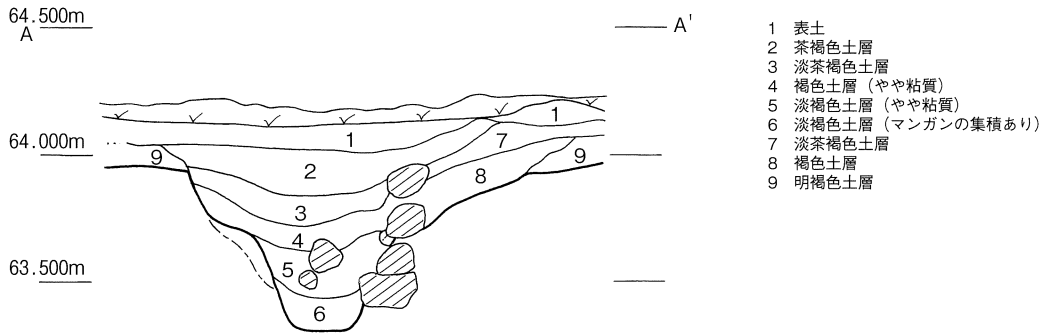
(1) 1号溝

1号溝は調査区の南側を画するようなかたちで検出された。北西から南東方向に向けて伸びた後、ほぼ直角に折れて南西方向に向かう(第133図)。底面のレベルをみてみると、今述べた順に深くなっている。また、途中で2号溝と合流したり、3号溝が分流するが、詳細は各々の溝の項で述べる。

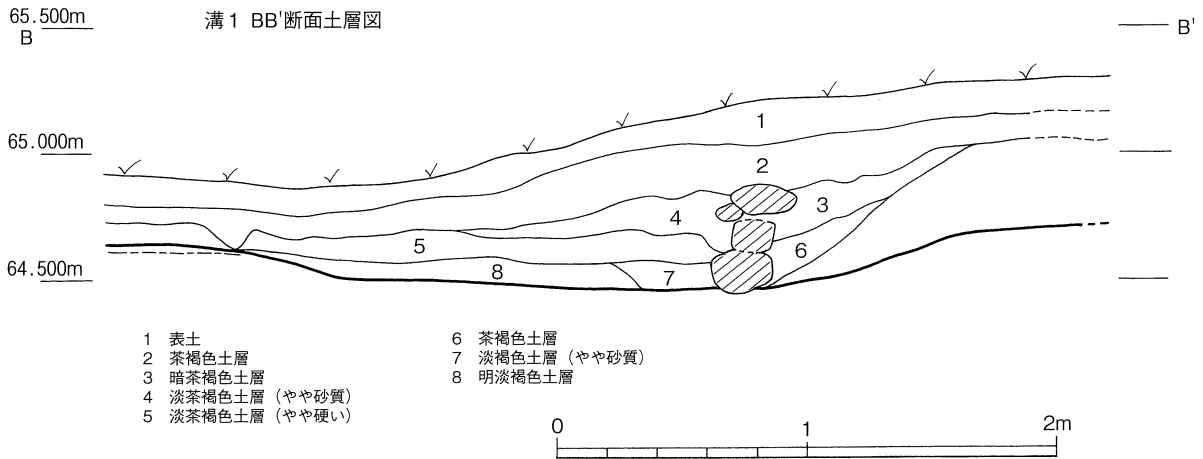


第137図 善福寺1地区1号溝出土遺物 (1/3)

溝1 AA'断面土層図



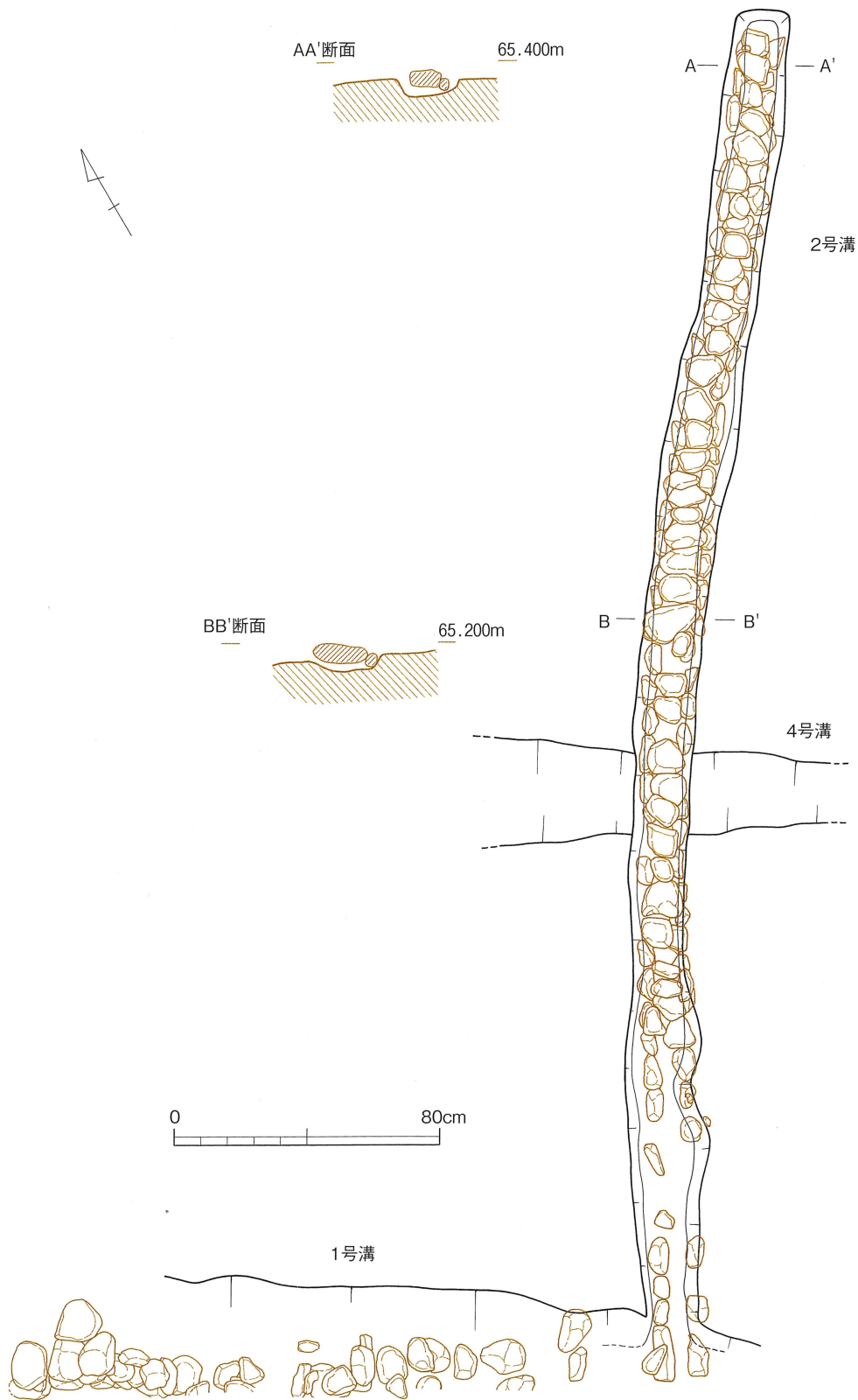
溝1 BB'断面土層図



第138図 善福寺1地区1号溝土層図 (1/30)

溝の規模は、幅約1～2m、深さ約0.2～0.8mで、北西から南東に向かう部分が幅が広く浅いのに対し、南西方向にのびた部分は幅が狭くて深い。従って、溝の断面形態も、浅い部分が概ね逆台形を呈するのに対し、深い部分はV字に近い形態を呈する。

また、一部では0.2～0.3mの河原石を積んだ護岸が残存している（第138図）。しかし、残存す



第139図 善福寺1地区2号溝 (1/40)

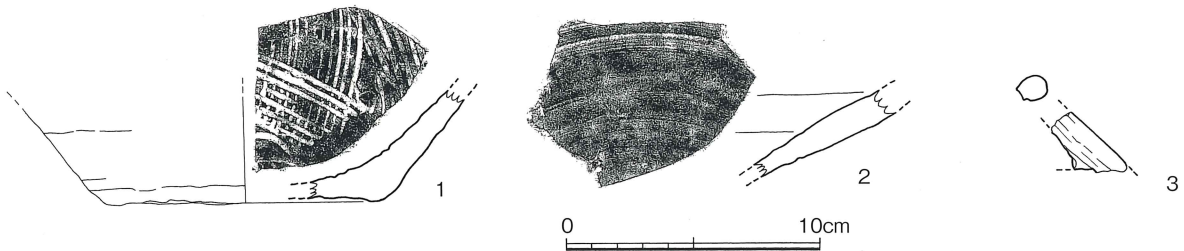
る部分が少ないため、護岸がどの範囲に施されていたかなどの詳細は不明である。

溝内からは、護岸の崩落した礫などに混じり、陶磁器が出土した。図示できるものは少なかったが、近世～近代のものがみられた。溝の凡その使用年代を示すものと思われる。1（第137図）は、18世紀末～19世紀の肥前染付皿である。

（2）2号溝（第139図）

1号溝に直交するかたちで合流する。河原石を敷き詰めた暗渠と思われ、途中で4号溝を切る。溝は、幅約0.4m、長さ8mを測るもので、両側辺に0.1～0.15mの河原石を立て、その上を覆うように0.2～0.4mの扁平な河原石を連続して置く。

溝からの出土遺物は少量であるが、主なものを図示する（第140図）。1、2は備前焼の播鉢と思われる。3は関西系陶器鍋の把手で、19世紀以降の所産である。

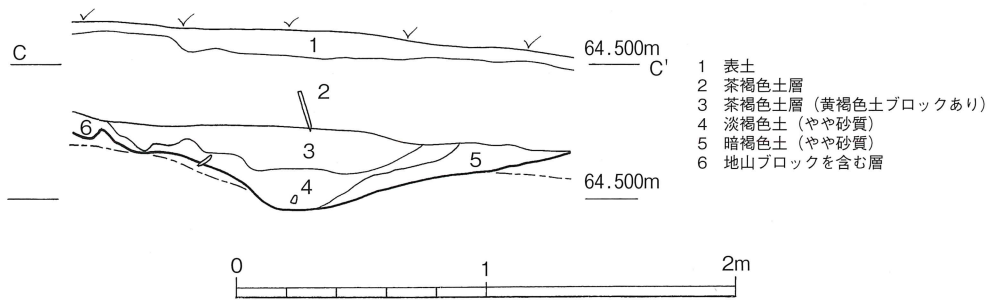


第140図 善福寺1地区2号溝出土遺物（1/3）

（3）3号溝

3号溝は1号溝が直角に折れる付近から分流するもので（第133図）、幅約2m、深さ0.3mを測る。断面形態は、U字形ないしは緩やかなV字形を呈する（第141図）。1号溝と切りあい関係にある可能性もあったので詳細な観察を行ったが、切りあいの状況は認められず、同時に存在したとの結論を得た。

溝からの出土遺物は小破片が多く、図示できるものはなかった。



第141図 善福寺1地区3号溝土層図（1/30）

（4）4号溝

4号溝は、1号溝の北東約4mを1号溝と平行して走るもので、2号溝に切られる。調査区外から続くもので、調査区内で約10mが確認できた。規模は幅0.4m、深さ0.1～0.2mである。

溝からの出土遺物は目立ったものがなく、時期は不明である。

2 土 坑

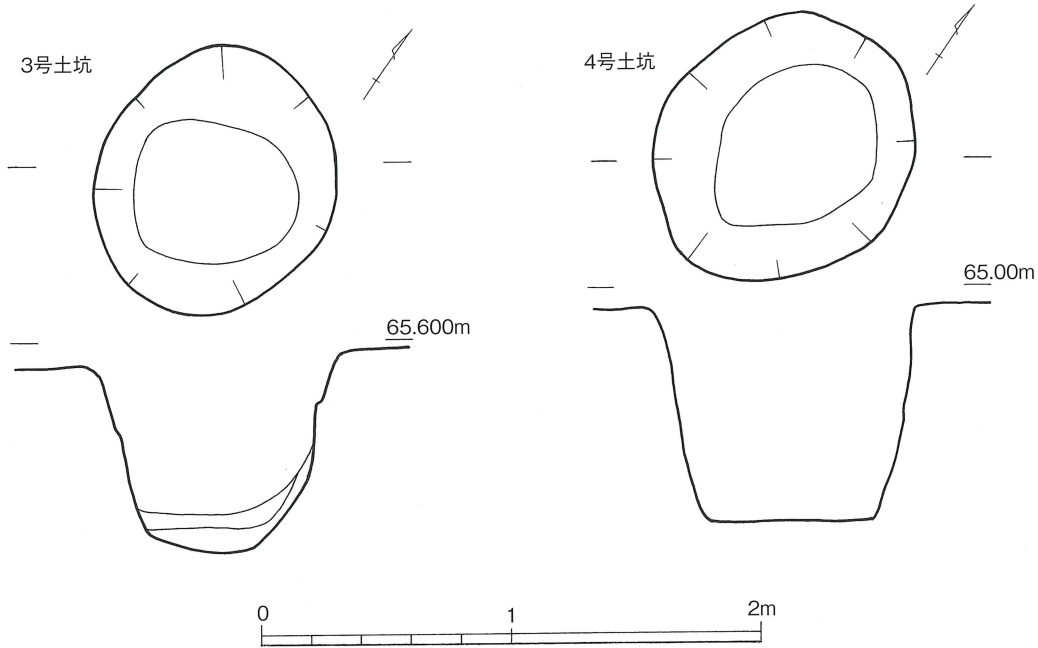
(1) 3号土坑 (第142図)

1号溝が直角に折れる付近に位置する。

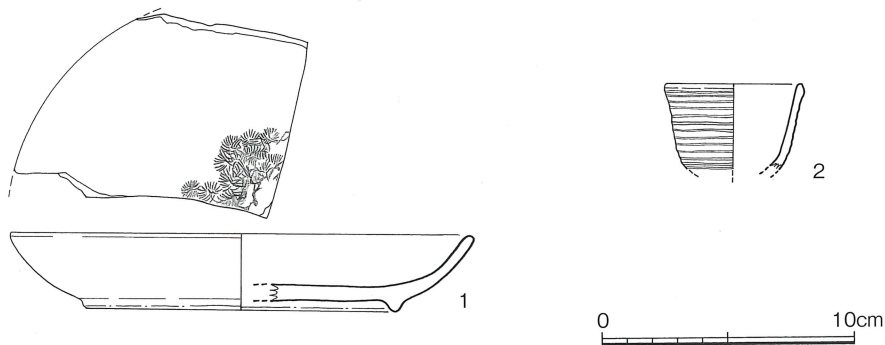
平面形態は円形を呈し、径約1m、深さ約0.7mを測る。側壁の上部では剥落が目立つが、側壁と床面については基本的に三和土が塗られている。

本土坑については、改修のため床面がかさ上げされており、改修後の床面から約0.1m下に築造時の床面が確認できた。

出土遺物 (第143図) のうち、1は肥前染付皿で、大正から昭和にかけてのものである。2は関西系陶器小坏で19世紀の所産であろう。



第142図 善福寺1地区3号土坑・4号土坑 (1/30)



第143図 善福寺1地区3号土坑出土遺物 (1/3)

(2) 4号土坑 (第142図)

3号土坑の北東約18mに位置する。

平面プランは、3号土坑同様に円形を呈し、規模は径約1m、深さ0.8mである。やはり、側壁と床面に三和土が塗られている。また、床面については、かさ上げが行われている。

3 掘立柱建物跡

(1) 1号建物 (第144図)

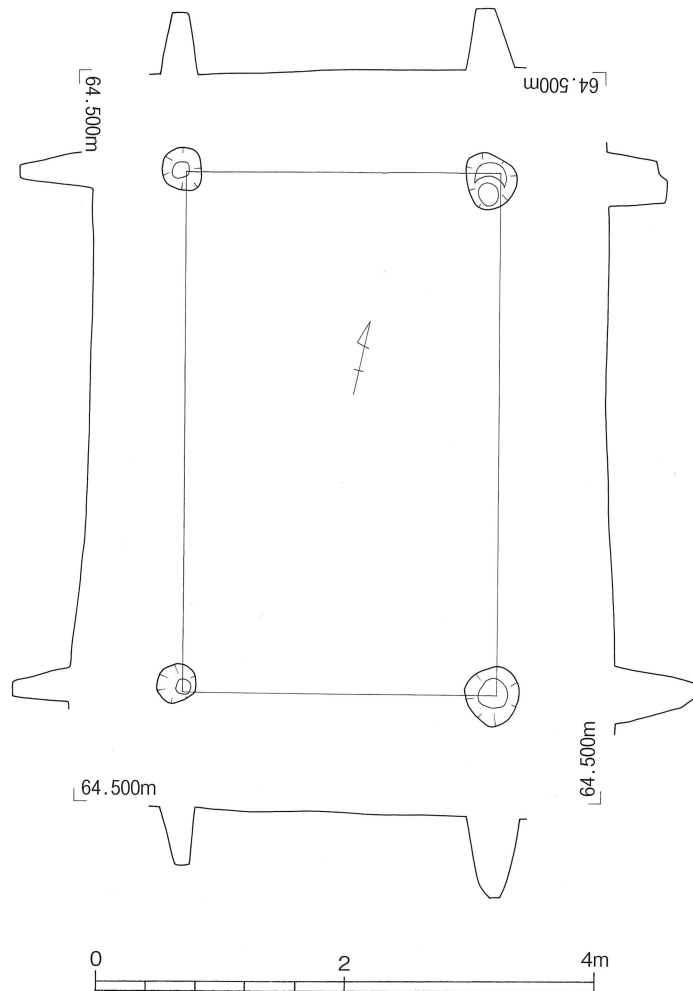
調査区の北東隅に位置する。建物は1×1間で、南北方向に長軸をもつ長方形プランを呈する。規模は桁行4.1m、梁行2.5mで、身舎面積10.25㎡を測る。

建物は、本建物が1棟確認されたのみである。通常、掘立柱建物は数棟が単位となって屋敷地を形成する。本遺跡の場合、調査区外が緩傾斜地であることから、周辺に建物があった可能性は低く、特に本建物よりも大型の建物が存在したとは考えにくい。本建物は、屋敷地より離れた作業小屋的な建物であったものと考えられる。

また、建物の時期については特定できないが、遺跡内の出土遺物から判断して、近世～近代に位置付けられよう。

4 小 結

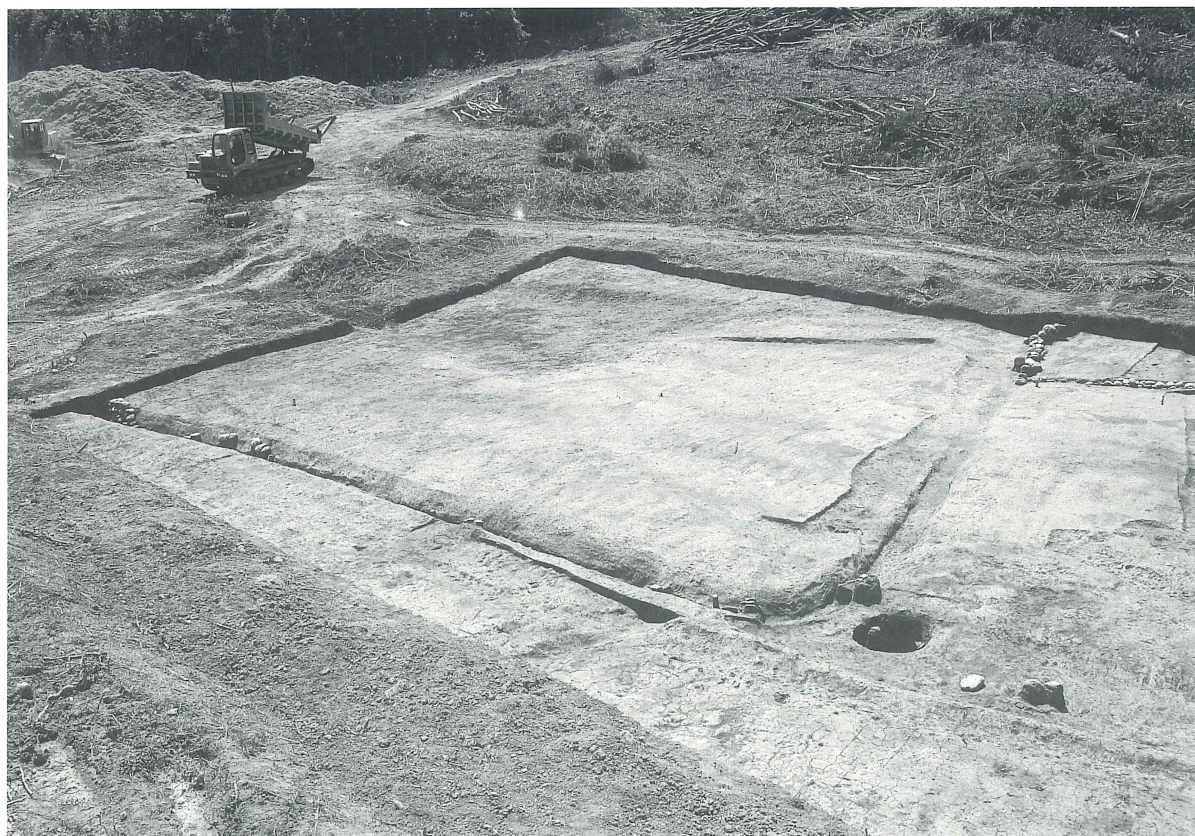
本地点からは、古代及び近世～近代の遺構・遺物が確認された。古代については、土坑2基のみで、その性格等は不明である。また、近世～近代にかけては、屋敷地に関連する遺構が検出された。近世の屋敷地と墓地については、調査区東南側の丘陵上にその跡地がみられる。



第144図 善福寺1地区1号建物跡 (1/60)



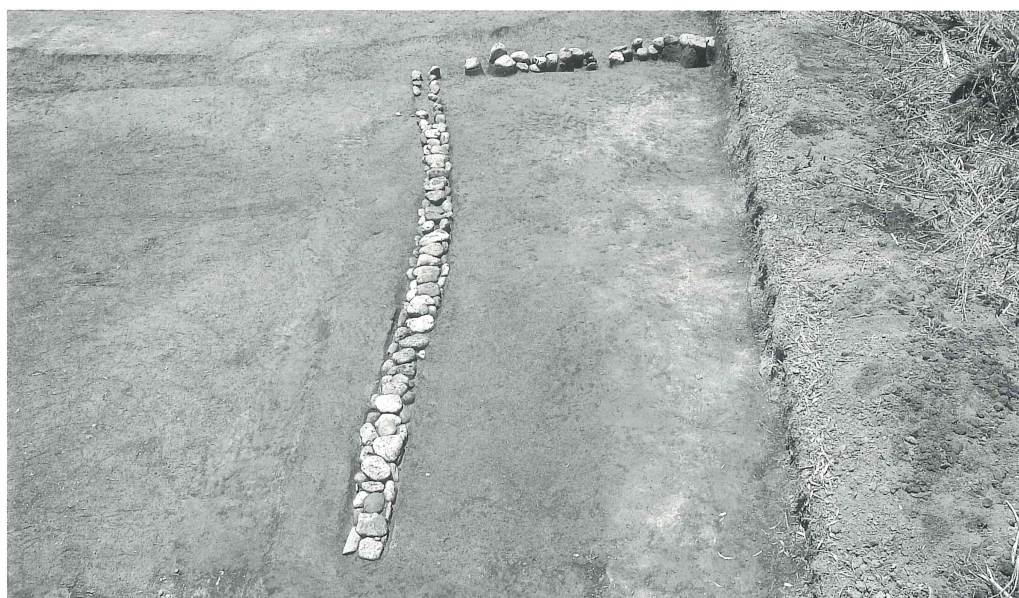
調査区全景



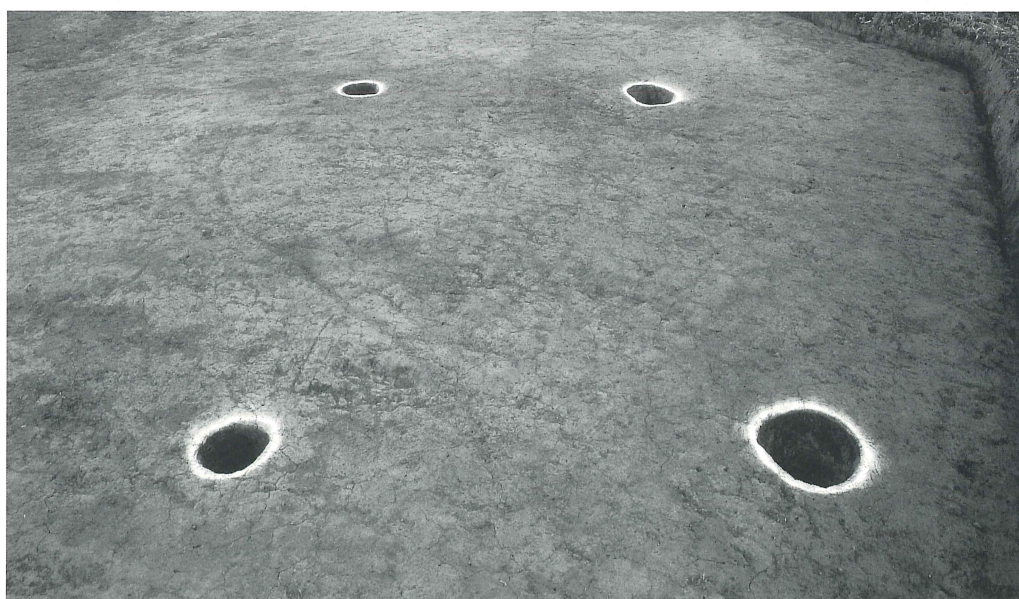
1号溝全景



1号溝断面と
石積み



2号溝



1号建物